

# 仮面ライダーウォー レックス

マフ30

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

そう遠くない未来

ある日、地球に飛来した隕石に潜んでやって来た超蟲人インセクター。

彼らは日常の闇に紛れて、この星に存在するあらゆる宝物を奪おうと暗躍する。

遙かな時を経て再来した恐るべき災厄に立ち向かうのは太古の神秘と科学の粋を合わせて生まれた白亜の竜騎兵——仮面ライダーウオーレックス!!

いま、あらゆる絶望と恐怖を薙ぎ倒す烈なる激進が始まる!!

これはきつと、勇気と信念と笑顔が溢れる宝箱のような物語。

# 目次

プロローグ 超蟲人來襲 | 1

レコード：01 白鋼の戦竜 ①

26

レコード：02 白鋼の戦竜 ②

79



# プロローグ 超蟲人來襲

これは——そう遠くない未来の物語。

夜の街は昼間から降り続く春の雨にどこか薄ら寒くて、静かだった。

普段は仕事や学校終わりの人々が電灯の光の下で賑やかに食事や遊びを楽しむのがこんな日の夜はそんな喧騒も低音量だ。

そしてこんな夜だからこそ、なんてことのない暗闇やほんの小さな虫の羽音がひどく怖く思えてしまう。

「毎度ありがとうございます」

「あつぶねー。閉店ギリギリだったよ……」

遅い時間帯ということもあり、既にシャッターが閉じた商店街の一角にある花屋で薔薇の花束を買った青年がいた。くたびれたスーツがこの青年が今日と言う一日を懸命に働いたことを証明しているようだ。

「全く、今日に限って抜けられない残業なんてうちの会社は人情もなにもないよ。おまけにこの天気も」

片手に持った花束を濡らさないようにビニール傘の下にやって、半ば自分が濡れネズ

ミになるのは覚悟した足取りで青年は愚痴をこぼしながら通行人の少ない大通りを小走りで駆けていく。

「けど、稼がないと生活できないし頑張るしかないか。もうすぐパパになるんだしな！」  
青年には家庭があつた。

そして、もうすぐ一人の父親になるささやかながら幸せな未来を控えている。

大事そうに抱える花束も入院中の愛する妻のために、彼女の好きな薔薇の花束を彼女の陣中見舞いの一つとサプライズに買ったものだった。

「にしても、ちつとも止まないこの雨。あんまり濡れた恰好で病院にも行けないし、タクシー拾うか？」

『オマエ……今、イイ顔シテタナ』

誰もいないバス停の屋根の下で一度足を止めた青年はスーツの雨粒を払いながらうんざりした顔で真つ暗な夜空を見上げた。生まれてくる我が子のためにも節約生活を実践中の青年だが風邪でも引いて働けなくなつては元も子もないと考えていた時のことだった。

さつきまで何の気配もなかったはずなのに、周囲には誰もいなかったはずなのに——  
ふと背後から声を掛けられた。

「あの、何か俺に言いま——」

『ソレを手にしてから、イイ顔をしていたな。ツマリ、ソレはオタカラだな？ お宝ナン  
ダナア!?!』

「ひぎやああああ?!? な、何だお前わああああ?!?」

振り返つてしまった瞬間に青年は背後に立つ者の貌を見て、本能的に悲鳴を上げて  
ひっくり返つた。彼の目の前にいたのは黒いローブに身を包んだ明らかに人間ではな  
い恐ろしい姿をした異形の存在だったのだ。

『騒ガシイ奴だ。オイ、オマエ……コレは才宝ナンダロウ？ 乱暴に手から落として、壊  
レタラ如何スルンダ？ モツタイナイ』

「は？ はあ?!? 何をして……宝?」

音もなく現れた。否——正しくは止まない激しい雨によつて羽音を掻き消されて現  
れた謎の異形は例えるなら昆虫人間。

クワガタムシを思わせる立派な双角を持ち、緑色の鎧騎士のような刺々しい恰好を  
ローブの下からチラつかせるおぞましき蟲の人型だった。

彼の、彼らの名は——インセクター。

星の海の果てから再びこの青い星へとやってきた恐るべき超蟲人である。

そして、青年は恐怖に襲われながらもはつきりと理解出来る人語で話しかけてくるこ

の異形の言葉と姿に首を傾げるしかなかった。何故ならクワガタめいた蟲人は青年が思わず投げ捨ててしまった薔薇の花束を大事そうに拾い上げると宝と呼んで慎重に泥や汚れを払い落しているのだ。

『コノ、才宝……もつと欲シイゾ！ オマエ、手伝エ!!』

「う、嘘だろオ！ た、助けてくれえ!!?」

薔薇の花束を恍惚とした表情で見つめたかと思うとインセクター・アークスタッグは興味の対象を青年に向けて猛然と刺々しい甲殻に覆われた右腕を伸ばしてきた。

「ダメ——」

『ムウ……ナンダ?』

「や、槍? き、君は……?」

間一髪の危機だった青年を救ったのは横から暗夜を貫いて放たれた一本の短槍とそれを握る黒髪赤眼の少女だった。

濡羽色のショートカットに左右のもみあげのみを長く伸ばした髪型、翡翠色を基調にしたセーラー服風の民族衣装を纏った不思議な雰囲気少女。その胸元には円型の不思議な琥珀を使った首飾りが揺れている。

「インセクター、無関係の人に手出しはさせない」

『俺達を知ッテイル? 変な奴ダナ。オマエ、オマエもこれが欲しいのか?』



「いりません」

疾風のように突然に青年とアークスタッグの間に割って入った少女はそのまま恐れることなく、異形の怪物に向かって再び短槍の矛先を向けて追い散らそうと試みる。

「君は一体？ 危ないから一緒に逃げよう！」

「すみませんがお一人で逃げて下さい。クリューは戦う術を心得ています」

「いや、でも！」

「シャノン、おねがいします！」

「はいはいっと！」

「な……え……っ？」

何がなんだかまるで状況が呑み込めないながらも、見たところ高校生ほどの少女を見捨ててはおけないと力づくでも一緒に逃げようとする青年。

けれど、クリューと名乗る少女の呼び声に応じて何処からか飛び出してきた新雪のような銀髪をツイントールにして踊らせる少女が手に持つ、骨のようなタクトから発せられた淡い光を目にすると急にぐったりと気を失ってしまった。

「ごめんねお兄さん。親切なのはありがたいけど、ここからはちよーつと関係者以外立ち入り禁止ってことで！」

「人払いは？」

「結界張ったから、よほど大騒ぎしなきゃ大丈夫！ それにしたって、島の外は色々とすごいったらないねー！ 気を付けなよ、クリュー」

シャロンと呼ばれた赤いアオザイ風の民族衣装を纏ったクリューに比べると明朗快活な雰囲気のある少女。彼女は彼女の故郷に伝わる法術で眠らせた青年を抱えながら、戦闘を担うクリューに声援を送る。

彼女達は昔からインセクターの脅威を知り、その災厄に立ち向かうための力を現代にまで継承させてきたとある一族たちの一員だった。

「平気です。このために生きてきた命です」

「むう……そうかもしれないけど、そんなわけないんだから！ 自分大事に、ファイト！！」

ガラス細工の花のように可憐だがどこか儂く危うげな雰囲気を醸し出すクリューの言葉にシャロンは少し頬を膨らみながら、彼女なりの励ましを陽気な声で伝えると戦いの邪魔になりそうな青年を安全な場所まで運ぶために一時離脱していった。

そして、単騎でアークスタッグと対峙するクリューは雨の冷たさにも顔色一つ変えることなく、両手に握った二本の短槍を静かに構える。

「インセクター。あなた達のこととは昔話によく聞かされました。残念ですが大人しく帰らないのなら倒します」

『嗚呼、思い出シタ。思い出シタ——大昔にここを餌場にした時もオマエのように邪魔をスル連中が居タヨウナ……鬱陶シクテ、仕方ナカツタ』

「やああああ！」

鋭い牙が生え揃った人間でも昆虫とも異なるまさしく怪物の口元を卑しく歪めてほくそ笑むアークスタッグにクリューはまるで羽毛のような軽やかな身のこなしで突っ込むと、右手に持った槍を相手の胸を狙って突く。

『フーン！ ソンナ、玩具デ何が出来る？』

「こーういふことだつて、出来ませす！」

徐々に流暢になつていく日本語を介しながら、アークスタッグは他愛もないと槍の矛先を強固な外殻で覆われた胸で受け止めた。だが、これはクリューも予想済みだった。

本命の一撃は更に精神を研ぎ澄ませて放つ左の一薙ぎ。彼女が攻撃を放つ瞬間に首飾りの琥珀から力強い光が零れると、常人の力を超えた臂力で繰り出された一撃がアークスタッグの体に鋭い裂傷を刻み込んだ。

『うおっ?! 嗚呼、そうだそうだった。あの時も可笑しな力を使っていた連中がいたな。随分と長い年月が経つたと思つたがマダ、残っていたわけだ』

「はい。私たち竜の民はずつとずつと、あなたたちを覚えていましたよ。私たちの星の平和のために」

クリューの言葉と心に応えるように首飾りの不思議な琥珀「ウェイクアンバー」の輝きが増す。この太古から現代にまで受け継がれたオーパーツに宿る恐竜の因子が彼女に奇跡の力を授けていた。

自慢の肉体に傷を受けて、咄嗟に反撃に移ったアークスタッグ。しかし、クリューはその一撃と大きく跳躍して回避すると軽々とバス停の屋根の上に着地して落ち着いた様子で双槍を構え直した。

『いいだろう。この赤く壊れやすいお宝を集めるついでにオマエからも強奪するとしよう』

「……花は壊れるじゃなくて、散るのでは？」

『クハハ！ ハナ！ 花と言うのかこのお宝は!!』

絶妙かつ、決定的にズレが生じている価値観と知識からどこか滑稽なやりとりをクリューと交わしながらアークスタッグは小さな虫籠のようなキューブを取り出すとすつかり花卉が散って萎れてしまった薔薇の花束を放り投げた。

『生まれ出でよ、バググラァー！ 思うまま奪い！ 心ゆくまで貪れ!!』

『バギギイイ!!』

人知の領域外にあるアイテム「ジョイントケージ」に吸い込まれた薔薇の花束は既に禁忌の蟲籠に組み込まれていた蜘蛛の遺伝子と溶け合い一つの生命として生まれ落ち

る。

「こんなことが……本当に」

黒く禍々しい光が収まって雨の街に怪物の鳴き声が轟く。

クリューの視線の先には薔薇の顔を持ち、鋭い蜘蛛の前脚のような四肢と薔薇の棘だらけの触手をあちこちから蠢かす、この世の物とは思えない融合怪人バーグラーが顕現していた。

『お望み通り、俺はこの場は帰ってやろう。スパイダーバーグラー、たつぷりと略奪を楽しめ』

『バギギギイイイイ!!』

「くっ……負けるもんか」

スパイダーバーグラーはおよそ理性の欠片もない獰猛さを剥き出しにしてクリューへと襲い掛かった。鋭利な手先で電柱やバス停の屋根を手当たり次第に切断すると、触手で彼女が立つ屋根の残骸を巻き取って滅茶苦茶に投げつける。

「ハイヤアアアア!」

『バギギギ! 花! 花! 花アアアア!!』

「ぐっあ、あああ!?!」

スパイダーバグラーは宝物と認識している花を一心不乱に盗み取ろうと無数の触手を街路樹や花壇に這わせる。そして、その滅茶苦茶な波状攻撃は意図せずに短槍を突き立てて、健気に戦いを挑むクリューを小石でも蹴つ飛ばすかのように打ち据えた。力の差は哀れな程に明確だった。

『オタカラ！ 欲シイ！ 欲シイ欲シイ欲シイ！ モット欲シイ!!』

「あ、がつ——!? うう……こんなにも力の差があるなんて」

無軌道に振り回される茨を伴った蔓の鞭がクリューの白く瑞々しい肌を打ちのめす。頬やショートパンツから覗かせる健康的な太もも、服の下の腹部に至るまで痛々しい赤い痣や血が滲む裂傷を負いながら、クリューはあきらめることなく怪物を倒そうと果敢に触手の躍動を掻い潜ろうとしては弾き飛ばされ傷ついてく。

「やだ……やだ！ ずっと鍛えてきたのに、ずっと守り手の使命を果たすために頑張ってきたのに！ 何も出来ないなんて……きやうツ!」

『花！ 花！ 花！ 才宝いっばい！ デモデモ、モット欲シイ!!』

懸命な足掻きで短槍を振って、触手の何本かを切り払うも所詮は無駄な足掻きとばかりに触手で何度も打ちのめされるクリュー。スパイダーバグラーからしてみれば、彼女は未だにまともに敵意さえも向けていない雑草のような存在だった。

強欲なバグラーの叫びを聞きながら、クリューは平時ならやや無機質だが穏やかで

整った顔を悔しきで歪め、目尻に涙を溜めていた。痛みや恐怖で涙するのではない。彼女は自分の無力さに悔しくて仕方がなかった。

「まだ……だつ、私は戦うんだ。平和を守るために」

物心ついた時から彼女に両親はいなかった。

それが決め手になったのか、素質もあつてクリューは代々受け継がれてきた守り手という名誉ある役目を任せられて、血の滲むような修練を積んできた。

多くの人々を災厄の再来から守るために、大切な平和な時代を守るために、自分と言う命を例え碎けても構わない守り刀のようにする想いで修業に明け暮れてきた。

積み上げてきた今までを無駄にしないためにもよろめきながら立ち上がったクリューだったが偶然にも飛んできた触手の一本が彼女の頭部を無慈悲にも叩きつけて、水溜りだらけのアスファルトに転がした。

「みる。私を見なさい……私は！ 貴方の敵なんだ！ 私を見て、戦いなさい！」  
それでも彼女は立ち上がって吼えた。

どんなに無様な姿になっても、見るに堪えない醜態を晒しても、今までの努力を無駄にすれば自分が自分で無くなってしまうような気持ちに駆られて。

何よりもこの恐るべき怪物が結界の外に放たれたら、大勢の罪のない人々たち犠牲になつてしまう。さつき助けたあの青年も——彼が奮ったなけなしの勇気を無意味にし

ないためにもクリューはボロボロの体に喝を入れて未だに自分を相手にしようとしな  
いスパイダーバグラーに立ち向かっていく。

「これでも……くらえ!!」

生き物のようにならながらも、無計画に振り回される触手たちを研ぎ澄ませた精神  
力で見極めて、足場代わりに駆け上がりスパイダーバグラーのガラ空きになった頭上  
を捉えると渾身の力で槍を投擲した。

『ギバ!! 耳障りナ、奴ダナ……オ宝ジヤナイナラ、死ネヨオ?』

短槍は見事にスパイダーバグラーの薔薇の花のような顔に突き刺さり、短い悲鳴が  
上がる。だが、そこまで大きなダメージを受けた様子の見られないスパイダーバグ  
ラーは蜘蛛腕の先端から粘着性の糸をクリューの足首に発射して捕まえると薔薇の触  
手で拘束する。

「あう!? こ、この……これぐらい、つくぎいいい!」

クリューの全身に巻きついた触手がうねうねと蠢きながら少しずつ締め付けを強め  
ていく。スパイダーバグラーは相変わらず彼女のことを敵としては認識していない  
ようだが気が散る小虫程度には鬱陶しく思ったようで念入りに彼女を潰す気になつた  
のだ。

空中で雨に濡れながら大の字で触手に拘束されたクリューは全身を苛む不快な痛み



に堪らず苦しげな声をひり出した。

「クリュー!? こんの、蜘蛛薔薇オバケ! クリューを放しなさいよ!!!」

手先に力が入らず、手にしていた短槍を落としてしまうほど追い詰められたクリューの元へシャロンが駆けつけて、タクトを振るい法術による光弾の連射を浴びせるがウエイクアンバーの加護を受けていない彼女の攻撃ではまるで効果がなかった。

急がなければクリューが死んでしまうと青ざめた顔をしながら、微々たる攻撃を続けるシャロン。すると急にその背後から騒々しいエンジン音を響かせながら一台の自動車が人払いの結界を物ともせず突っ込んできた。

黒塗りの車はそのまま迷うことなくスパイダーバグラーに突っ込むとフロントが歪に凹むことにも躊躇わず、怪人を撥ね飛ばしてクリューを触手の拘束から救い出した。

「ゴホツ、ゲホツ……なにあれ?」

「え、ええええ!? どうなってるの?」

シャロンがボトリと地面に倒れ落ちたクリューを抱き上げながら、予想外の方向へと急転し始めた状況に困惑していると半壊した車から三人の人間が降りてきた。

「ボス、ターゲットを特別製ワイヤーネットによる拘束に成功。とは言え、稼げる時間は僅かです。交渉は迅速にお願いします」

「明日の朝食の仕込みもありますので見殺しにはしないでくださいませ、ご主人♪」  
 「分かっています。なので、お二人も死なないように頑張ってください」

燕尾の執事服の男とメイド服姿のシニヨンの女性がネットランチャーを使ってスパイダーバグラーの動きを封じて時間稼ぎをしている間に残るもう一人の青年。細身でどこか血色の薄い優男風の青年がアタツシケースを片手にクリューたちの元へと駆け寄ってくる。

「はじめまして、竜の民の方たちですね？ ボクは竜童<sup>りゅうどうきつか</sup>吉家。貴方たちの味方であり、かつて竜の民の皆様を命を救われた男の子孫です」

「えっと、こんばんは」

「ご丁寧にも……じゃなくて！ 急に出てきてそんなこと言われても困るんですけどー！」

突然やってきて自己紹介してきた吉家という青年に素直に挨拶を返すクリューとシャロン。シャロンの方がハツとなつて自分が施した結果を素通りしてきた謎の人物たちに怪訝な顔を向ける。

「時間がないので説明は後回しです。その君、傷だらけのところをすみませんがコレを使つてもう一度戦ってください！ 君の首飾り……ウエイクアンバーの力をもっと引き出せる道具です」

後方のスパイダーバグラーの様子を気にしながら、吉家はアタツシユケースを開けて変わった形をしたベルトのようなガジェットを取り出してクリューに差し出した。

「ちよつと待つて、どうして外の人間がアンバーのことを知ってるのよ！ それにこの子はもうこんなにボロボロなのよ!？」

「ですから、無理を言っています。お恥ずかしい話ですがボクではまるで戦力になりません。この力を纏う資格すらもない」

竜の民の秘宝にも等しいウエイクアンバーを外界の人間でありながら何故か知っている吉家に驚きと警戒心を見せるシャロン。何よりも大きく肩で息をしながら、自分を心配させまいと呻き声を押し殺している、痛々しい姿のクリューを心配しての言葉だった。

だが状況が状況だけに吉家の方も簡単には譲ろうとはしない。

自分が発言の全てに責任と心苦しさを噛みしめながら、数え出したらキリがない後悔の念を顔に浮かべる吉家のベルトを握る手に力が入って微かに揺れていた。

「……それを使えば、私はまだ戦えますか？ ううん、勝てますか？」

「ま、待ちなさいってばクリュー!？」

無言で睨み合う二人のその膠着を破ったのは傷の痛みもじつと耐え忍んで未だにあきらめない強い意志を宿した瞳で吉家を見つめるクリューの言葉だった

「はい！ 必ず、これは君の大きな力になります！ そのためにボクたち一族は心血を注いできました」

「わかりました。借ります！」

クリューは悩む間もなく力強い言葉で頷くと吉家の手から化石発掘用のルーペのよ  
うなバックルが取り付けられたベルト「サーチドライバー」を受け取ると自分の腰に装  
着した。

「バックルのグリップを下げてもスロットに君のウエイクアンバーを装填してください  
！」

「ん……どう？」

「プテラー！ スペクタキュラー・デイスカバリー！！」

吉家の言葉に従ってサーチドライバーに首飾りから取り外した円型のウエイクアン  
バーを嵌め込んでクリューがグリップを上げる。するとバックルのルーペとウエイク  
アンバーが重なり合って、電子音声が発せられた。

「き、機械仕掛けのベルトが喋ったあ!？」

「叫んでください。力を開放する言葉を……変身です！」

見慣れぬハイテクガジェットに驚くシャロンの隣で吉家が声を上げる。それを受け  
てクリューは少し戸惑いながらも彼を信じて勇ましく身構えて――。

「変身……!!」

「メイロン！ リューダイン・アクション!!」

ベルトのウエイクアンバーから青い光と共にメカニカルなテラノドンが召喚され雄々しい咆哮を上げるとバラバラに分離。そのまま無数のパーツとなってクリューの全身を覆うように装着されていく。

『すごい……力が湧いてくるのを感じる』

闇を払うような光が収まるとそこには一人の蒼き竜騎兵が佇んでいた。

白いアンダースーツに翼竜の片翼を模した胸当てが特徴的な狩人風の青い軽鎧。頭部を包むテラノドンを思わせるトサカが特徴的なシャープなフォルムの青い仮面には菱形の黄色い複眼が月のような輝きを放っている。

「クリューが変わっちゃった!?! あ、アレ何なのよ？ 外界の鎧はみんなあんなのばっかなわけ!?!」

「成功だ……クリューさん！ それが君の新しい力、ダイナメール・リューダインです!!」

『この鎧、恐竜の力をずっと強く深く感じる……これは一体?』

「これがひと段落したらボクの知っていることは全てお二人にお話しします。終わらせて、いただけますか?」

『はい……必ず！』

吉家の全てを託したと言っているような眼差しにクリューは真摯に頷いた。

科学と太古の神秘とが混じり合った叡智の鎧を纏ったクリューの脳内にはダイナメイルのスペックデータが流れ込んでいた。

全く何を言っているのか意味の分からない言葉もあるがこの力の使い方を矢継ぎ早に覚えたクリューはリューダインとして今にもワイヤーネットを引き裂いて吉家の連れれの二人を襲おうとしているスパイダーバグラーに向かって駆け出す。

『いってきます！』

サーチドライバーの左側にあるボタンをタップするとバックル中央のウエイクアンバーからプテラノドンの頭部と嘴を模した矛先を持つ二本の短槍・エールスピアが召喚されて、リューダインの手に収まった。

専用武器を握り締めた彼女は生身の時とは比べ物にならない速さと強さを発揮して、スパイダーバグラーの茨の触手を目にも止まらぬ早さで斬り払って肉薄していく。

『ギギヤアア！？』

『これなら、やれる！』

先程は成す術もなく打ち据えられて、手も足も出なかつた触手たちの動きがいまの彼女には見えていた。見切れることが出来た。

あちこちが痛くて、裂けた肌は不快な熱を帯びている。だけど体は羽毛のように軽く、槍を振るう腕の力も遥かに力強い。

舞を踊るような身のこなしでスパイダーバーグラーの攻撃を捌きながら、双槍による乱れ突きを浴びせて弱らせていく。

『バーグラーの邪魔をスルナア！ 才宝を奪ウンダヨオオオオ!!』

しかし、スパイダーバーグラーも簡単には崩れない。

触手の攻撃が通用しないと分かると蜘蛛腕から発射されると蜘蛛の巣のように広がる糸弾を乱射して応戦する。

『それならこれを……スマッシュボウガン』

連続バク転で回避しつつ後退したりユードインはベルト左側のボタンを再びタップして別の武器を召喚する。お次に召喚されたのはプラノドンの両翼を思わせるボウガンでサブマシンガンのように引き金の前側にマガジンらしきパーツが組み合わさっている。

『はああああああ！ やってやります!!』

「クリューが飛んだあああ!？」

スマッシュボウガンを装備したりユードインが両足を強く踏み締めて気合の叫びを上げるとその背面からは肉抜きされた白銀の両翼が展開される。次いで骨組みのよう

な翼に膜を張るようにエネルギーが流れ満ちるとリューダインは青い光の翼をはばたかせて大空へと飛び立った。

『ありったけ……撃ちまくります!!』

夜闇を裂いて飛行するリューダインはスパイダーバグラーの攻撃を回避しながらその上空を旋回して、スマッシュボウガンから光の矢を連射していく。

その後もある時は一直線に急接近しながら一点集中で速射を、またある時は敵の四肢を的確に狙い撃ちにして、魔天楼のビル群を潜り抜けて初めてとは思えない見事な空中殺法を披露した。

『バギ……イイ、イ!? ナニガ、どうなっている! サツキマデハアンナニ弱つちい奴だったの!!』

『そうです。私はまだどうしようもなく弱くて、未熟者です。だけど……それでも守ることをあきらめていい理由にはならないと思うから』

鳥よりも華麗に、羽虫よりも雄大に、大空を飛び交って光の矢による嵐のようなリューダインの急襲に見舞われたスパイダーバグラーは形勢逆転とばかりに一気にポロポロになり追い詰められていった。

スパイダーバグラーは雑草のように何度叩き潰しても屈せず立ち上がって来るリューダインの強さの本質がまるで理解できずに初めて恐怖が滲んだ声でヒステリック



クに喚き散らした。

『いまはただ……あなたを飛び越えて、今日より強くなって見せます!』

【ボルテージ・ダイマックス!!】

勝負に出たリューダインはサーチドライバーのグリップを強く捻り込む。すると電子音声の響きと共にウエイクアンバーから流れる超エネルギー・ダイナオラムが最高出力で全身に駆け巡って蒼き翼の竜騎兵は神秘的な輝きを全身から解き放つ。

『はいやあッ!!』

大地を蹴って再び夜空に飛翔したりリューダインはぐんぐんと上昇して雨雲を突き抜けたところで体を錐揉み回転させて飛び蹴りの姿勢を取る。

『やあああああッ!!』

強化された視力で地上のスパイダーバグラーを捉えたりリューダインは一直線に急降下決めて、敵の脳天に落雷のような蹴撃をまずは一撃叩き込んだ。彼女はそこから全ての力を振り絞ってスパイダーバグラーに突風を巻き起こすような連続蹴りとこれでもかと浴びせていく。

『バツ……ギバババギバアアアアア?!?!』

『これが私の——全力踏破、です!!』

これこそがリューダイン必殺のメテオスコールバッシュ!!

シメの一撃と鋭く蹴り込んで着地したりユーダインが深呼吸して残心すると一拍の間を置いてスパイダーバグラーは断末魔を上げながら盛大に爆散して四散した。

当世において最初のインセクターと人類の戦いはギリギリまで追い詰められても決してあきらめなかつたりユーダインの勝利で幕引きとなった。

「ハア……ハア……シャロン。私、勝てましたよ……あう」

「クリュー！ 全くもう、この子は本当に無茶ばかりするんだから」

変身を解いたクリューは傷だらけの痣だらけな痛ましい姿でありながら、満足したように素直であどけない笑顔を示してみた。

しかし、気力体力ともに限界だったこともあり、僅かな気の緩みから糸が切れたマリオネットのようにその場で崩れ落ちてしまう。

「すぐに手当てが出来る場所へとお連れします。本当にありがとうございました」

「あんたさん……一体全体なんなのよ？」

間一髪でクリューを抱き止めたシャロンを手伝いながら吉家は改めて、自分たちに代わってバグラーと戦ってくれた二人に深い感謝の言葉を伝えた。

「大昔にボクの曾祖父は貴女たちの故郷であるまぼろし島に漂流しました。名は竜童万次郎と言います。そこで彼は竜の民の人々からこの星を狙う略奪者たち……インセクターの存在を聞かされたんです」

「万次郎……あ！ あ、あ、あ!？」長老が言つてたわ、日本にいたらマンジロウを頼れつて！ じゃあ、あんたさんが——!？」

「良かった。これなら交渉がスムーズに捗りそうだ。ええ、どうか遠慮なくボクたちを頼つて下さい。一緒に戦いましょう」

あたふたと慌てて驚くばかりのシャロンに吉家はにこやかな表情で告げた。

今宵、まだ肌寒い春雨が降りしきる空の下で彼らは出会った。

虚空の果て、希望と絶望がひしめき合う星の海の彼方から再び来襲してきた大いなる試練を打ち克つために。

けれど、この物語を真に綴るにはまだ役者が欠けていた。

どんな過酷で絶望的な運命だつて破壊するような希望的イレギュラーの存在である。

※

「お！ 流れ星だ。ラッキー」

「アホかお前……これだけ雨降つてるのに流れ星なんて見えるわけないだろう」

「そうか？ 気合入つてる流れ星なら雨に濡れても煌めくんじやないの？」

「無機物に気合も何もねえよ！ お前の筋肉じやないんだからそう易々と一般常識を覆

「されてたまるかってんだ」

「だつははは！ 今度の街でのパフォーマンスで俺の上腕二頭筋VSチェーンソーでもやってみるか？」

「極度のスプラッタなのは危なすぎるからアウトだよ。定番のダンベルジャグリングのアレンジでも考えてろ。ガソリン染み込ませたタオル巻いて火いつけるとか」

「スケさんの危険の基準もばっちり一般常識から脱線してると思うぞ」

「カッカッカ！ 気のせいだろお」

リューダイスがスパイダーバグラーと戦っている頃に一台のトラックに乗った二人組の若者がこの街に訪れようとしていた。

一人は金髪碧眼の日本人離れた容姿と鋼のような逞しい体躯の持ち主ながら、どこか能天気で間の抜けた空気を漂わせている青年——なるかみたいら鳴上平良。

もう一人は桜色の綺麗な髪を一本結びにしている性別不詳の中性的な容姿を持っていながらどこかガラが悪く黒いオーラを醸し出している美青年——ゆきむらさきすけ幸村喜介。

旅の大道芸人ともいストリートパフォーマーを生業にしているこの二人が竜の民の少女たちと出会う時、初めて運命の歯車は動き始める。

「にしても、止まないこの雨」

「俺たちが街について、諸々の準備が終わるころには晴れてるぞ」

「そりやあいい。誰も彼も腹いっぱい笑わせて、腹いっぱい稼ごうじゃないの」  
「星に願いを……つてか？」

「他力本願は好きじゃないな。なんだつて自分の力で叶えた方が面白いに決まってる  
！」

彼らの乗るトラックのバックミラーには交通安全のお守りと一緒に恐竜の顔のようなエンブレムが刻まれた円型の琥珀が吊り下げられていた。

それは紛れもなく太古の生命の力が宿りしオーパーツ・ウェイクアンバーだった。

これはきつと、勇氣と信念と笑顔が溢れる宝箱のような物語。

此度のお話はその序章である。

## レコード：01 白鋼の戦竜 ①

竜の民。

太古の昔から現代に至るまでお伽噺の魔法使いの如き法術と呼ばれる秘術を駆使して、絶滅したはずの恐竜の生き残りたちと共生を続ける神秘の一族の存在を知る者はあまりいない。

彼らは大海原を自由に移動する奇跡の島・まぼろし島と呼ばれる秘境に隠れ暮らしていると言う。かつては大陸にもその足跡が確認されているのだがその事実は公には発表されていない。

太古の逞しき生物の力を宿したオーパーツ・ウエイクアンバーもまた空想の産物として扱われて、近代になるまで歴史の表舞台には決して姿を見せることはなかった。

何故ならば、それらの記憶・記録の大半さえもが彼らの首魁によって食い荒らされてしまっていたのだから。

大昔——その最初の襲来時期の記述すら食われ失伝してしまった虚空からの侵略者たち、インセクターとの過去に起きた戦いによって。

20XX年——。

ある日のこと太平洋・日本近海に隕石らしき飛来物が複数個落ちてきた。

調査の結果、宇宙からのこの謎の落下物は鉱物ではなく極めて特殊な成分で構成された虫の繭に近い物質とすることが判明した。

中身は発見時には既に全て空洞となっており、同時に派遣された調査隊第一陣のメンバーは全員が調査対象に接触から一時間の間に行方不明となった。

早々に世界規模の緊急会議が行われた結果、前代未聞の超法規的措置ながら一連の事態の更なる真相の究明及び対処はとある民間組織に一任されることが決定された。

神話の英雄達にあやかり名付けられた組織名をアザールゴと言う。

※

目が覚めて最初に飛び込んでくる白い天井に思わず身構えて、すぐに自分がどこにいるのかをクリューは思い出す。

彼女たちは当面の滞在地として竜童吉家がオーナーをしている化石や鉱物を展示し

ている博物館などがあるフィールドアスレチック施設「目覚めの森」の職員用宿舎の一室をそれぞれ貸してもらっている。

「素敵なお部屋なんだろうけど、慣れないな……」

肌蹴た浴衣を直しながら体を起こして大きく伸びをして深呼吸。

薄暗い部屋の窓辺から微かに陽の光が差し込んでいるのを見て、少し気持ちが明るくなる。

「よし。朝稽古だ」

ふわふわの日本のお布団の心地良さは名残惜しいものがあるけれど、こんな朝の空気を吸いながらする日課の稽古はいつも以上に実りがある。ベッドから飛び起きて支度をするときクリューは愛用の短槍二本を片手に外へと出た。

「せッ！ はあッ！」

故郷の島で守り手の先達たちに教わった動きの数々を反復して槍を振るい、身体を躍動させる。

無心。無心だ。

ひたすらに無心で動きを、技を、術を肉体に刻み込むように。自分と言う存在の一部にするような心構えで彼女は槍を振るう。

だけど、目まぐるしく変わった日々の前ではどうしても無心ではいられないのも本当



のことで――。

※

クリューが最初の戦いを勝利で収めてから四日が経過していた。

彼女自身は戦いでの怪我や初変身の負担で大きく消耗しており、最初の一日目は殆ど眠っていたようなものだったのだが。

そして、目が覚めてから傷が治るまでの三日間は吉家や彼の付き人である執事の法月一太郎や有栖川しおんらに付き添ってもらい現代社会の一般知識を覚える勉強漬けのような日々を送っていた。幸いにも、言葉や文字は竜の民に伝わる法術のお陰で不自由はないが映像や書物で説明される外の世界の全てが新鮮で刺激的だった。

一方でクリューが眠っている間にシャロンは吉家から彼らアナザーアルゴと呼ばれる集団の事情をより詳しく聞かされていた。

竜童吉家曰く、彼の一族が経営するリウドウカンパニーの創始者である竜童万次郎は半世紀以上昔の世界大戦時に乗っていた飛行機がトラブルから海に墜落。絶体絶命のところまで竜の民たちの故郷である、まぼろし島との接触を果たしたのだという。

竜の民に命を救われた万次郎はその後、運悪く出くわした他国の海賊船の攻撃からまぼろし島を守ったことで当時の竜の民たちと深い親交を育んだ。

同時に万次郎は竜の民たちから大昔に地球を襲った人外の略奪者・インセクターの脅

威やウエイクアンバーのことを教えられたのだという。

義侠心に燃えた万次郎は竜の民の人々にこう宣言したと言う。

『この星にとつての脅威は、私たち全ての人間にとつての脅威だ。遠い未来、その時が来てしまった日に備えてせめて私だけでも貴方達を支える力を準備しておこうと思う。だから、どうか……貴方達が背負つて来た使命を僅かでも私たちも肩代わりさせて欲しい』

この言葉を信じた当時の竜の民の長老は島にあつたウエイクアンバーの幾つかを日本へと帰る万次郎に託したのだそうだ。

帰還した万次郎は戦後の混乱期において裸一貫から起業して、血の滲むような努力の末に幸運も味方して世界経済にも影響を与える一大企業であるリュウドウカンパニーを作り上げたのだ。

そして、様々な分野への事業開拓を進めると同時に秘密裏に超常現象を扱う研究機関を設立して来るべきインセクターの脅威に対抗するための装備の開発などに取り組んできたのだと言う。

※

「おはようクリュー！ その感じだと怪我也バツチリ治ったみたいだね。良かった、よかった」

「うん。シャロンの法術のお陰です」

朝の澄んだ空気を清らかで迷いのないクリューの槍が幾度も裂いていると窓の中から聞き慣れた明るい声があった。振り向くとエプロン姿のシャロンが野菜などの食材が入ったダンボールを抱えて、にこやかな表情ですっかり元気になったクリューを見ていた。

「シャロンは今日も朝ごはんのお手伝い？」

「まあね！ いくら事情があるとはいえ、タダで住まわせてもらってるわけだし。出来るところで働いてもバチはあたらないかなーって」

「すごいなシャロンは……私なんて自分の寝起きでまだ手一杯なのに」

元気いっぱいな眩しい笑顔を見せるシャロンにクリューは頼もしさと同時に羨ましくも思っていた。早くに身寄りを亡くした彼女にとって少し年上のシャロンはまさに本当の姉のような存在でいつも色々世話を焼いてもらっていたが、こうして全く未知の場所に来たことで改めてクリューはシャロンの明るい社交性の高さや行動力に感心するばかりだった。

「なにか私にも手伝えることはない？ 切ったり盛りつけるぐらいしか出来ないかもし

れないけど……」

「クリューまで気を使わなくていいよ。本業もあるんだから、ゆっくりしてな」  
「そ、そうかもだけど」

シャロンにそう言われて、クリューの表情には思わずしょんぼりと陰が入る。彼女の言葉に悪気がないのは分かってはいるし、自分などが厨房に入っても邪魔になるだけというのもその通りなのだが——なんとというか、置いていかれているような気がしてクリューの心には一抹の寂しさのようなものがあつた。

「たはは。そんな顔をするんじゃないやありませんっば！ それじゃあね、クリューには後片付けの皿洗いをお願いするよ。大量だから覚悟しときなさいね。けど、それよりも大事なのは朝ごはんたくさん食べることだから、それでいい？」

「う……うん！ 任せてよ、私がんばるから！」

クリュー本人に自覚がないだけで見事に心細さが顔に出ているのだろう。

やれやれと苦笑しながらシャロンはクリューに役目を与えると彼女は捨てられた子犬のようにしゅんとしていたのが嘘のように目を輝かせて声を弾ませた。

「本当にすごい量だから、あとで弱音吐いても聞かないんだからね。あと、張り切り過ぎでお皿を割らないように」

「心得たよ！」

クフフ。と絵本に出てくる魔法使いのように妖しく笑っておどかさずシャロンにクリューは両手をグツと握って返事を返した。

クリューと言う少女を例えるのなら清廉無垢という言葉が一番似合うのだろう。しかし、それはずつと守り手として戦うための技術、誰かを守るための手段を学ぶことに費やしてきた彼女という少女がまだまだ人生経験の浅い、微笑ましいほどに素直で無邪気な幼い子供であること裏返してもあった。

「それじゃあ、すぐに食べられるだろうから汗を流して食堂にいらつしやいな」

「そうするよ。じゃあ、美味しい朝ごはんをよろしくお願いします、シャロン！」

山林を駆ける野兎のような身軽さで走り去っていったクリューの後姿をしばし見つめて、シャロンは可愛い妹分のために美味しい朝食を作ってあげようと密かに気合を入れていた。

※

「ふー……た、確かに思っていたよりも手強かったなお皿洗い」

朝食を食べ終え——ちなみに今日の献立は出汗巻き卵と豚汁にきゅうりの浅漬けだった。

お役目の皿洗いをやり終えたクリューは想像以上に凝り固まった肩や腰をほぐしながら、宿舎の外をふらついていた。

「シャロンは管理人さんについてどこかに行っちゃったし、私はどうしよう?」

少しあどけなさが残るクールな顔を困ったように傾げさせながら、クリューはこれらの時間をどう過ごすかについて迷っていた。

島にいた頃は修練の他に海や林へ狩猟に出たり、シャロンの家の畑を手伝ったりとやることは色々あったがこの日本での生活は勝手が違いすぎる。

どうしたものかと、あてもなくシャロンを探してまた手伝えることがないか聞こうかと思っていた時だった。

「おはようございます。ここでの暮らしには慣れてきましたか?」

優しい口調の声に振り向くとそこにはスーツ姿の吉家が柔和な笑顔を見せて立っていた。すぐ後ろには初老ながら、よく鍛えられすらりとした長身の持ち主である執事の一太郎と美人だが何を考えているのかよく分からない不思議な雰囲気メイドのしおんが控えている。

「おかげさまで。ここのお布団というものはすごく気持ちがいいので夜もぐっすり眠れています」

「それはよかった。君にはこれからも色々頑張ってもらわなければならないので不足

があつたら気軽に教えて下さい」

「い、いえ……そう言えば、前に言っていた私のアンバーのえつと、アップ……」

「クリューさんのウエイクアンバーのアップデートの件ですね？」

「そうです」

言い慣れない単語に言い淀んでいるクリューに代わって吉家が穏やかな口調で尋ねた。

彼によると前回無事に変身に成功したダイナメール・リューダインではあるがあれがフルスペックの状態ではないのだと言う。

というのも、あの時はクリューが島から持ち込んだ素体のウエイクアンバーを使ったが本来はアンバーに専門的なテクノロジで更なる改良と調整を施すことで初変身以上の能力を引き出せる完全版が誕生するのだと言う。

「準備は出来ているのですがアップデートはどんなに突貫工事で進めても数日はかかる大規模な作業でして、こうしてインセクターが現れた以上は唯一の戦力のクリューさんにはいつでも変身できる状態を維持してもらわないといけないですからね……」

「そうでしたか……」

「いま、控えの戦闘要員をなんとか工面している最中なのでそれまでは大変ですが現状の装備で頑張っていただけないでしょうか？」

「心配しないで下さい！ 私はそのためにずっと修練して生きてきました！ だから、必ず皆さんの協力に応えるためにもお役に立ちます!!」

「ありがとうございます。ですが、ボクたちとしても子供の君だけを矢面に立たせるのは心苦しいものです。だから、少し肩の力を抜いていきましよう」

「いえ！ 無理なんてしてませんし、私なんかそんな気を病まないでください。私はみんなを守るためにただの槍のようなものです」

あれこれと至らない不甲斐なさを謝る吉家にクリューは見るものからしたら少しひた向きス着にも過ぎにも思える熱意を見せて言った。

だが、クリューの言葉は幸か不幸か嘘偽りのない全てが真実だった。少なくとも彼女にとつて、インセクターと戦うための練磨された人の形をした存在。

歪だが物心がついた頃にはすでに身寄りがなく、明確な居場所や心の拠り所が幼いことから曖昧だった彼女にとつて守り手で在ることは唯一の存在理由のような物だった。

「では、いまはそういうことにおきましよう。話は変わりますが他に何か困っていることはありませんか？ まだまだ日本の生活に慣れるだけでも大変でしょう？」

「あの、でしたら……なにか戦い以外にお手伝いすることはありませんか？」

クリューの瞳に宿る一步間違えばどうなってしまうのか未知数な危うさを感じ取った吉家は話題を変えた。そこでクリューは今日一日の過ごし方について手持ち無沙汰



になつてゐることを素直に告げた。

「それなら、今日は街の方を探検してみるのはどうですか？」

「探検ですか？」

「はい。映像や本で学ぶよりも直に見て触れた方が学び覚えることは遥かに多いです。この目覚めの森のコンセプトもそんな感じですね。それに街の地理を覚えておくことは戦いにも役立つものだと思ふのですが」

「た、確かにそうだと思います」

「それじゃあ、出発する前にいいものを渡しますよ。一太郎さん」

どこか誘導しているような吉家の話術に乗せられたクリューはうんうんと頷きながら今日の予定を決めたようだった。外見よりも子供っぽい一面を見せる彼女の姿に和みながら吉家は一太郎に目配せをすると精密機械のような無駄のない動きで彼はクリューに一台のスマートフォンを手渡した。

「あの、これは？」

「携帯電話と言うものでございます。持っていると色々便利ですので所持して下さい。シャロンさんにも同じものを渡すつもりでしたので丁度良かったです」

「ありがとうございます、私はまだこれの使い方がイマイチで……」

「クリュー様がそれをお持ちになつてゐるだけで、こちら側から貴女の居場所も探知す



備を無理やり突破して奪った謎の人物。私めも彼女たちは可愛いと思いますし、好みの色に染め上げ甲斐があるので良い友人ではいたいです。が警戒を忘れない方が賢明かと」  
「……ええ、肝に銘じておきますよ。では、ボクたちも日々のお仕事を始めましょう」  
しおんの助言を胸の奥に秘めながら吉家は敷地内にある博物館の館長室——すなわち、自分の仕事場へと歩を進め始めた。

表向きは大企業の直系一族の三男坊として、道楽と称して慈善活動を行う優男として通している吉家だが、その裏では曾祖父の意思を誰よりも強く受け継いで武器無き机上の戦いを日夜繰り広げる一端の指揮官でもあった。

※

「賑やかなところだな。島とは全然違う」

ゆるやかな歩調であたたかな日差しに照らされる街並みを眺めながらクリューはしみじみと呟いた。リユードインとして空を飛んだり、戦っていた時は背の高い灰色の雑木林のように感じていた魔天楼もこうして人々の活気のある声が増えられると華やかに感じてくるから不思議である。

知らないうちに、胸の奥がドキドキで高鳴っている感覚をじっくりと味わいながらク

リユーは真紅の瞳を輝かせて興味を覚えたもの全てをじつくりと観察しながら方々を巡った。

「見える景色も人の格好もみんな違うけど、たぶんこの街もここで暮らす人たちも島とは変わらないだろうな……」

目に映るもの、肌で感じるもの、手に触れるもの――。

全てが未知の物といって等しく、何もかもが新鮮だった。

だけど、同時にこの知らない事だらけの街でクリユーは上手く言葉には出せないが暮らし慣れた故郷で感じていたものに近い大切な何かが息づいているのを直感で気付いていた。

「ふーん……なんだかみんなせわしなくて、忙しそうなんだな」

ステップを刻むような軽やかな足取りと、修練の賜物かごった返した他の通行人の狭間でも踊るようにくるくると鮮やかな動きで縫うようにすり抜けて街を探検するクリユーもまた周囲の人々には不思議なものを見る眼差しを向けられていたのはご愛嬌だろう。

「あれはなんだろう?」

あくまでお役目のつもりだったのに気が付けばすっかり楽しみながら街の散策に夢中になっていたクリユーはふと緑が多い都市公園の向こうから聞こえてくる歓声に足

を止めた。

「すごかったなああの金髪の兄さんの筋肉！ まるで鋼みたいだったぜ、ヒューー！」

「ピンクの司会の人の軽業もやばかったな！ とうか、顔が綺麗過ぎて不覚にもドキドキしたわ！」

「ネット公開厳禁のパフォーマンスつてのは本当だったよ。あれは動画じゃなくてリアルでみないともったいないよ」

公園から出てくる人たちの会話を横から聞いてみるがクリューにはチンブンカンブンだ。どうやら、何かお祭りのようなことが行われているらしいということは何となくわかった彼女は自身の好奇心の赴くままに吸い寄せられるように多くの人が利用している大きな公園の中へと入っていった。

※

キャンプやBBQも出来る広大な公園内では楽器の路上ライブをしている人やジャグリングに手品など路上パフォーマンスをしている人達もチラホラと見かけられた。

その中でも一角に設けられた小さなステージの一つには二人組の男たちから成る巷でそこそこ有名になってきたストリートパフォーマンスコンビ・ファニーメーカーがこの

日何回目かの公演を行い始めたところだった。

「はあい！ みなさま、元氣してますか？ 絶好調なアナタも、そうでないアナタもボクたちのステージを見てスマイル満開になってくれると嬉しいです！」

「お客様たちもご安心ください！ お子様にも無害な元氣いっぱいになれる見るドラックもといプロテインです!!」

「不吉なワード出して親御さんたちの不安煽るやつがあるか！ ボクたち、ホントに健全ですからね！」

肩甲骨あたりまで伸ばしたピンクの髪を派手なアップに纏めて、サーカスの団長のような動きやすい改造スーツを着ている喜介は司会進行も担当しながら素でボケまくる相棒にキレのあるツツコミを入れる。

対象的にパフォーマンスのメインでありながら、自信満々にちよつとおバカな発言を連発してフリーダムに振舞っている平良はとうとうとサスペンダーと赤ネクタイはしているが上半身は裸という変質者一步手前の際どい恰好をしていた。

「お客様に最初に宣言しておきますが俺はこんな恰好をしていますますが別に罰ゲームとか、イジメられているとかそういうネガティブなものは一切ありませんのでご安心ください！ 筋肉という名の一張羅を纏っていますから！ 特にドンオーコングのコスプレでもありません!!!」

「ウソつけ、さり気なくネクタイにマジックでDKみたいにNTって書きやがって！密かに憧れてるの丸分かりじゃねえかよ！しかもNTじゃあまるで機動戦士に乗ってるパイロットじゃねえかよ、ややこしいなあ!!」

少しマニアックだが漫才師も顔負けなテンポの良い挨拶に早くもネタがツボに入ったらしき観客達から笑い声が漏れていた。

「ちよつと待ってくれよ相棒！確かにちよつとはあの世界的有名なゴリラさんに便乗しようって下心はあったよ。でも見てくれ、俺のこの筋肉とこの赤いネクタイ……これは最早俺が二次元から飛び出してきたあのゴリラさんでも間違いではないのでは!!」

「お前は純然たる人間だろうが！退化してんじゃねえよ、人であることに誇りを強く持て！」

迫真の叫びを上げながら筋肉を漲らせてポーズを決める平良。盛り上がる腕の筋肉にあらかじめ魅せるために巻いていたテーピングが弾けるように千切れて、平良の逞しい肉体に失笑気味の空気だった客席から驚きの声が上がった。

そこに笑いを誘う喜介のツツコミも加わって、ギャラリーの空気は上手い具合に二人のノリに乗り出していた。掴みは上々と確信した喜介は満を持して本格的なパフォーマンスへと移行する。

「さあて！景気付けに我らファニーメーカーのド定番！ダンベルジャグリングだ！

発泡スチロールのダミーなんかじゃありませんぜ、奥さん！」

「ご覧下さいませえ！これが筋肉の可能性です！いずれは何かしらの病気とかにも効くでしょう!!」

一度、最前列のお客に持たせた5kgのダンベルを次々と喜介が放り投げるとそれを受け取った平良は軽々と三つのダンベルをお手玉のようにジャグリングしてみせた。

その後も平良は僧帽筋で器用にボールをリフティングしてみせたり、ブリッジした腹筋の上にバランスボールを乗せて、その上から喜介を立てさせてみせたりと種も仕掛けもないが尋常ではない筋肉と身体能力だけで数々の驚くべきパフォーマンスを披露してみせた。

最初は顔だけは文句なく良い二人に釣られた女性や冷やかし目的で立ち寄った者たちもいたが気が付けば集まっていた観客たちはみんな二人の魅せる技に驚きと歓声、そして笑顔を見せていた。

パフォーマンスが後半に差し掛かる頃にはステージの前に開けた状態で置かれた大きなギターケースにはお客たちが投げ込んだおひねりやチップが一杯に溜まっていた。

「すごいや、あの人……」

人だかりの隅っこでさり気なくファニーメーカーの公演を見ていたクリューも平良の常識外れの肉体に驚くばかりでその視線は釘付けになっていた。二人のやっている



ことの何が面白いのかは全くよく解っていないが平良の逞しく強靱な肉体は島にいた男たちに比べても桁違いのものでクリューは外の世界にもあんな屈強な人間がいるのかと感心する。

彼女が食い入るように真剣な表情でステージを見入っているとパフォーマンスはいよいよ最後の技に入ろうとしているようで喜介の鞆のように弾んだ美声が響いていた。

「ラストとなります、とっておきはボクたち二人の合体技！<sup>フルクリュー</sup>鷹匠！ あれ、司会やつ

てるお兄さんは実は大したことないんじゃない？ つて思ってる人のために、ボクもやればできるつてところをお見せしますよ！」

「よっしゃー！ いつでもきたまえ相棒!!」

「それでは皆様ご照覧！ ボクはやるぜ？ ボクはやるぜ！ ヒヤツホウ！」

そう言つて駆け出した喜介は真つ直ぐに伸ばされた平良の手の甲に跳び上がつて着地した。腕一本で大の大人の体重を支える平良の腕力にも驚きだが忍者のようにバランス良く僅かな面積の手の甲に立っている喜介もすごかった。

しかし、驚くのはここからと平良は手の甲に乗つた喜介を思いっきり上空に放り投げた。

「シヨータイムだ！ 皆々様、ご注もーく!!」

高々と数メートルは投げられた喜介はクルクルと錐揉み回転をしてから綺麗な垂直

のラインを描いてすくと再び平良の手の甲に着地。その瞬間に観客たちの動きは一つとなつてぶわつと押し寄せるような歓声が木霊した。

「どーも、どーも！ 皆様ご声援ありがとうございます！」

「よっしゃ、それでは今日は特別に客席のお客様でやってみたい人！ いまの簡単バージョンを体験してみませんかー!!」

「はっ。」

大成功に終わったステージ。

稼ぎも上々で内心は俗っぽい高笑いが止らない喜介がシメの挨拶に入ろうとした時、何を思ったのか平良が突然にそんなことを言い出した。

「ご安心ください！ 俺の手に乗ってもらったお客様をちよつと放り投げで俺がまたキャッチします。ちよつとオシヤレな高いたかーいみたいなノリだと思ってください！ さて、誰かチャレンジしたい人はいませんかー？」

「お前なにトラブルしか起きそうにないアドリブかましてんだオイ!? やめれえ」

「おーし、んじやいま俺の目の合ったその！ 長いもみあげがキマってる女の子にしようかなー！」

邪気のない笑顔と最高に仕上がった状態の弾ける筋肉を見せながら客席に語りかける平良の隣で声を押し殺しながら血相を変えて相棒を制止する喜介。

あわてふためく喜介を尻目に平良はずっと気になっていた一人のお客をそれっぽい理由を付けて指名した。

「えつと……私？」

「おう！ こつちに来てくれ。心配すんな、絶対に怖い思いも痛い目にも遭わせない！  
あるのは快適な空の小旅行だ！」

指名された少女もといクリューは突然のことすぎてキョトンとしていたが盛り上がる客席の空気に逆らえず、流されるままにステージに上がってしまった。

戸惑う彼女が怯えたように見えたのか平良は悩みなんて何も無いような底抜けに明るい笑顔を見せながら、鍛え込まれた見事な大胸筋を叩いて安心させるように言った。そして、流されるままに簡単な説明を受けたクリューは気が付けば平良の右手の甲に立っていた。

いつもよりも少し高い視線で見る景色は不思議な感覚だった。何よりも真っ直ぐに瞳に飛び込んでくる驚きや期待、不安に楽しさ——そう、笑顔だ。

大勢の人たちの生きた表情を目の当たりにして、クリューは胸の奥で初めて感じる感情が芽生えるたような奇妙な心地だった。

「それじゃあ、いくぞ！ いち、にの……さん!!」

「ッ……わぁ」

「豪快だが丁寧な大きな力に押し上げられて宙に舞ったクリューの顔に自然と笑顔が零れた。決して届いていないはずなのにまるで一面の青空に包まれたような初めて触れる世界の感覚。ほんの数メートル、ほんの数秒の空への極小旅行はクリューに一昨日、戦った時の飛翔では感じられなかったキラキラした気持ちを届けてくれた。」

「よつと。ん……あれ？」

「お、おう。おかえりなさいませ」

身体が重力に引き寄せられているのに気付いたクリューは何時ものようにくると猫のようなしなやかな身のこなしで受け身を取って着地した。

自分の後ろで面食らったような調子の平良の声が聞こえたことでクリューは初めて周囲がざわついているのに気付いた。

「お嬢さんすごかったね、いまの。体操か何かやってるの？」

「はえ……あ、しまった。つい」

そうなのだ。

放り投げられてから平良に受け止めてもらう予定のはずがクリューはいつもの感覚で喜介のものよりもキレイキレイの回転からの着地というプロのアクション俳優もビックリな動きを見せてしまっていたのだ。

「その、あの……地元の田舎で山遊びを少々」

場の空気から何か答えなければ不味いと感じつつ、シャロンのように上手くごまかすことも出来ないクリューは本当のことを相当にオブラートに包んでボソツと答えた。

見た目からは信じられない高い身体能力とこの素朴で気取らない清らかな雰囲気のがギャップのあるコメントに観客たちからは温かい笑い声が溢れた。

思わぬサプライズゲストの活躍でファニーメーカーの今回の公演は大盛況で閉幕した。

※

「……す、すごい目に遭った」

平良たちの公演が終わってから少し経った頃。

ぐったりした様子でクリューは公園に置かれたベンチの一つに力なく座っていた。

ステージから降りた後、彼女の元にはアクロバティックな動きに魅了された人々が押しかけてあれこれと質問攻めにあっていたのだ。

「外の世界はすごいことだらけだな」

どうにかこうにかそんな人混みからも解放されたクリューだったがその表情は疲れではいるが同時に何とも言えない充足感にも満ちて、穏やかな笑みがあった。

すると一息ついているところのクリューのもとに先程の二人組が正面から歩いて近づいてくるのが見えた。平良も今度はちゃんと服を着ている。

「よう、さつきは大活躍だったな！ お陰で俺たちも大繁盛だよ。お礼にこれ食つてくれよ！」

「あなたは……あの、すみませんが知らない人から物とかもらわないようにと言いつけられているので」

「いけねえ、ちゃんと名前言ってなかったな。確かに不審者だわ、いまの俺！ 鳴上平良つてんだ。よし、これでもう平気だな？」

「いやいやいや。控えめに言ってまだ相当に怪しいからな。ボクの方は幸村喜介だ。改めて、このアホの無茶振りに付き合ってくれてありがとう。こいつが持つてるのは出演料つてわけじゃないがせめてものお礼だ。遠慮せずに食べてくれるとボクたちも気が晴れる」

「あ、ありがとうございます。わ、私の名前はクリューと言います」  
簡単にクリューに挨拶を済ませた平良と喜介。

そして、喜介の説明を聞いてクリューはおっかなびつくりな手つきで平良の持つている甘くて香ばしい匂いがする紙袋を受け取った。

「本当は現ナマで小遣いあげたかったんだが、君未成年っぽいしそう言うのもマズイと

思つてな。こいつが食いのある物の方が良いって聞かないからよ。流行りの菓子じゃなくてすまない」

「スケさんの発想もオツサンくさいだろ？　そのキッチンカーで作つてた出来たてだから美味しいぞ！」

「あの……これは食べ物でいいんでしょうか？　お魚のようですが随分と焦げてカチカチです」

そう言つて、まじまじと湯気を漂わせるたい焼きを不思議そうにクリューは見つめていた。浮世離れた彼女の言葉に付き合ひの長さを物語るようなやや毒のある軽口を叩き合つていた二人は思わず固まつた。

「だつははは！　安心しなよ、それはそういう菓子なんだ。熱いから気をつけて食べてみなよ。ほら、ガブツと！」

「は、はは」

可愛らしいものを見たような悪意のない笑顔を見せながら平良は自分用に買つておいたたい焼きを一つ手にとつてお手本のように一口食べてみせた。ちゃんとした食べ物だと分かつて安心したクリューも平良を真似して、恐る恐ると小さな一口でたい焼きを食べてみる。

「くふふ　あは、ははっ……おいしいです！」

まるで小さな子供が初めて誕生日ケーキを食べたかのように普段は儂く涼しげな赤い瞳を無邪気に輝かせて、クリューはたい焼きの美味しさに頬を綻ばせた。

「こんな美味しい食べ物は何初めて食べました！ さぞ珍しくて、貴重なものではないでしょうか？」

「んなわけあるかよ、大袈裟な娘だな。おっと、失敬——君が盛り上げてくれたお陰で大儲け出来た今回の収入を考えれば、本当ならそれをーダースぐらい報酬で渡しても足りないぐらいの謝礼だよ。だから、そんなに畏まる必要はないさ。そこまで気に入ってくれたのなら嬉しい限りだ」

新世界が見えてしまう程のたい焼きの美味しさにすっかり狂騒気味のクリューは直立に立ち上がると恐縮していた。そんな彼女の世間知らずや浮世離れの言葉の粋を飛び出した珍しい態度に半ば呆れながらも喜介が分かりやすい説明を付け加えて納得させた。

「不思議なやつだな、たい焼き知らないってよ？ 記憶喪失じゃないだろうな？」

「飛躍しすぎだろ。身なりも変わっているし、名前からして海外生まれのお嬢様だったりするかもよ」

「あれか。ハンバーガーをナイフとフォークで食べるような高貴なお生まれだな」

「うん……平良よ、お前の中の上流階層のイメージは現代ではかなり庶民だぞ」



二人が思っている以上にたい焼きがお気に召したのか鼻歌交じりに嬉しきで上半身を左右に揺らしながら二個目を幸せそうに齧り付き始めたクリューを尻目にそんな只者ではないオーラを放つ彼女について二人はひそひそ話をしていた。

「ところで気になつていたのですがどうして平良さんは私を舞台の上に呼んだのですか？ あの時、私以外の人たちであなたに投げられたそうにしていた人が他にいたように感じたのですが」

「良い目してるなクリューちゃん。周りをよく観察してたもんだ！」

「あの……クリューでいいです。その、今日は街を見物して来いと言われたものだったので」

「ほお？ それよか、俺やスケさんも呼び捨てで良いぜ！ 敬われるほどお行儀よく生きてないしな！ お互いに窮屈しないで話せるのならそっちの方が断然いい！」

「ボクは少なくともちよつとは他人から敬われたいし、チャホヤもされたいんだが……まあ、君に任せるよ」

クリューは吉家とはまた違った空気を纏いながらも緊張せずに接することが出来る雰囲気醸し出す二人に不思議な居心地の良さを覚えた。こんな気分になるのはシャロンと故郷の島にいるシャロンの家族が相手ぐらいのものだった。

「答えは簡単だ。クリューだけがあのステージで俺の筋肉で笑つてなかったから」

「へ？ は、はあ……すみません」

「ごめんな。こいつ顔だけは良いけど中身はスカポンで毛細血管まで筋肉な筋肉信奉者みたいな不可解なところあるから、とりあえず最後まで話を聞いてやって欲しい」

力強く右腕の筋肉を漲らせて宣言した平良に喜介が死んだ魚のような目で補足をクリューに伝えた。

「クリューが随分と真剣な顔をして俺達を見てくれていたのは気付いてたけど、俺としてはやっぱり俺たちの芸を見てくれた人には何の気兼ねもなく笑ってスツキリした気持ちになって欲しかったからさ。だからちよつとサービス精神が溢れちまったわけだ」

「お二人は他人から笑われるような仕事をしているのですか？」

「カツカツカ！ その表現は辛辣だねえ。あー……日本語って難しい。けど、確かにボクたちのことを最初から嘲笑ってかかるような連中は良い商売相手なもの確かだな」

日本文化にまだ不慣れなことが災いして無邪気に本来ならかなり毒のある切れ味鋭いコメント言ってしまったクリューに喜介は大笑いすると勝ち気な顔を見せて言葉を紡いだ。

「ボクたちみたいな根無し草を真面目に生きようとしないうざけた奴って軽蔑の眼差しを向ける人やからかって小馬鹿にしてやろうとクリューが言うように悪意まじり笑にくる奴も少なくはない。けどな……」

「そんな連中がスケさんの考えた出来っこない無茶苦茶な演目と不可能を可能にする俺の筋肉に圧倒されて思わず腹の底から本気で笑っちゃまう姿を見るのが俺達には最高に痛快なんだよ」

他人に笑われるのではなく、あべこべに他人を心から笑わせる。

ストリートパフォーマンスという生業に掛ける情熱を喜介と平良は胸を張って力強く答えた。

「平良と喜介はすごく素敵な仕事をしているんですね。私にはそんなモノの考え方はできませんでした」

「これも平和な世界だからできるお仕事さ」

「お客が来なきやいつでも大型連休だしな。平和を守ってくれる人たちには感謝だよ。土日も盆も正月もなく頑張ってるんだろ？俺達には無理だな、スケさん」

「ノーコメントだ。気軽にその質問にお利口なコメントでもしたら胸を張ってこの自由人な生活が出来なくなる」

(……)安心ください。私が、絶対に、守りますから

社会の荒波に揉まれてきたような雰囲気を漂わせて碎けたやり取りを交わす平良と喜介を見つめながらクリューは自分と彼らに誓いを立てるように小声で呟いた。

彼らの言う平和を守るものであるクリューはこうして、のどかで平穏な世界で誰でも

無い誰かを笑顔にさせようと頑張っている現地人に触れあうことで自分が守らなければならぬモノの大きさを改めて知ることが出来たのだ。

そんな時だった。

クリューたちがいる場所から少し離れたところから不自然な大きな物音と激しい悲鳴の数々が聞こえてきたのだ。

「なんだいまの声!?!」

「BBQやつてる酔っ払いが喧嘩でもおっ始めたのかもな。日も明るいうちから良い御身分だぜ」

「ちがう……これは!」

悲鳴の大きさから、只事ではなさそうなことが起きているのではと次第に怪訝な顔を始める二人とは別にクリューは先日も感じ取った禍々しいオーラを察知して飛び上がった。

「いかなきゃ!」

インセクターの気配を感じたクリューが慌てて駆け出すがその手を平良が掴んで止めた。

「おいおいクリューどうした? 危ないからここにいなって。そんなに気になるんなら俺がちよっと見てくるから、ここで待ってな」

「ダメです！ お二人こそ、急いで逃げて下さい！」

「おわつと!？」

制止する平良の手を振りほどいて、クリューは臨戦態勢で騒ぎの方角へと走り去っていった。

「ウソだろ？ 俺が女の子に振り飛ばされたぞ!？」

「んなことに愕然としている場合か！ 大事な客だった子だ。怪我とかされる前に連れ戻すぞ！」

※

平和だった都市公園は突如として空から飛来した恐ろしい姿をしたインセクター・アークスタッグによって阿鼻叫喚の巷と化していた。

アークスタッグは目星をつけた対象の元に近づく道中に進路を妨げる邪魔な人間たちを強靱な力で薙ぎ払いながらキチユキチユと不気味な笑みを浮かべて闊歩する。

「た、助けてくれ！ 命だけは頼むう！」

『見ていたぞ！ お前のそれは随分と多くの人間どもを幸せそうな顔にしていた……お宝だな!!』

「はあ!？」

尻餅をついてガタガタと震えるジャグリングパフォーマーの青年の眼前に立ったアークスタッグは彼が持っていた金属製のリングに物欲に塗れたような眼差しを向けると禁忌の蟲籠を空に投げた。

『生まれ出でよ、バードグラー! 思うまま奪い! 心ゆくまで食れ!!』  
『ウオオオオオオン!!』

ジョイントケージに吸い込まれたジャグリング用のリングはケージに組み込まれていたダングムシの遺伝子と溶け合い一つの生命として生まれ落ちる。

『オオオオオオ……オ宝アアアアアアアア!!』

黒く禍々しい光が収束するとそこに顕現したのは頑強で丸みのある甲殻と冷たく硬い金輪を鎧のように両手両足に重ね束ねている橙色の体色をした異形だ。

恰幅の良い体型をしたローリーバードグラーは唸り声を上げると目に映る限りにリングのようなジャグリングの小道具を奪い取るのと同時にこの世の物とは思えない怪物の出現に慌てふためいて逃げ出す人々を襲い始めた。

「待て! それ以上はやらせません」

背を向けて逃げる人々を狙って投げつけられていたローリーバードグラーのリングを蹴り弾きながら、クリューは異形たちの前に躍り出るとサーチドライバーを装着した。

『この間の人間か？ 今度は思い通りにはさせやしねえぞ？』

「それはこちらのセリフです」

【プテラ！ スペクタキュラー・デイスカバリー!!】

小癪にも自分たちに立ち向かってくる邪魔者の出現にすっかり流暢になった人語を操りながらアークスタッグが恫喝するもクリューは竦むことなくプテラノドンのエンブレムが刻まれたウエイクアンバーをベルトのスロットに装填する。

「変身……!!」

【メイロン！ リューダイン・アクション!!】

ベルトから放たれる青い光の中から飛び出したメカニカルなプテラノドンを鎧として纏い、変身完了したリューダインは召喚したエールスピアを左右の手にそれぞれ握ると風のような素早さで斬り込んでいく。

『オオオオオン!!』

『やああああ!!』

突っ込んでくる敵を迎撃するべくローリーバークラーは両腕を豪快に振って腕のリング——チャクラムと言っても過言ではないそれを無数に投げ放つ。

迫るリングをリューダインは二本のエールスピアで見事に払い落とす。だが、無数のリングはまるで意思を持った生物のように地面や木々にバウンドすると思わぬ死角から

彼女を襲う。

『うわっ!! おかしな武器を……なら!』

背中や腿裏など予期せぬ場所にリングが被弾して苦しげな声を漏らすリューダイン。しかし、前へ進む勢いは衰えず突き立てた矛先は確実にローリーバグラーへと近付いていく。

『バラバラにしてヤル!』

『これならどうだ!』

ローリーバグラーが再び数え切れないリングを投げつける。防いでも跳ね返ったリングが反動で再び襲ってくる厄介な攻撃だがリューダインはならばと卓越した槍捌きで全てのリングの輪の中を突いて絡め取ってしまった。

『せいッ! ハアアア!!』

募集したリングをカウンターにローリーバグラーに槍の一撃ごと叩きつけて怯ませるとリューダインはエールスピアの間合いを活かして、華麗な連続攻撃をお見舞いしていく。

一方の槍で敵の防御を払い、強烈な一閃を浴びせる。

拳を放たれば片方の槍を相手の腕に絡ませて攻撃を逸らし、決じ開けたボディに鋭い突きを放つ。



槍兵として一人前の腕前のリューダインは腕力や防御力では上をいくローリーバーグラーを相手に軽快なテクニックで優勢に戦いを進めていく。

※

「なんだありや……戦ってるの、クリューなんだよな？」

何色もの悲鳴がめちやくちやに飛び交う公園で戦うリューダインとローリーバーグラーの姿を目の当たりにして、平良は鳩が豆鉄砲を食らったような顔で驚いていた。

クリューを追いかけて行った先で見えたものがまさか彼女が自分が子供の頃から持っているお守りによく似たクリスタルのような物で姿を変えて怪物と戦っている光景だなんて、夢物語にもほどがある。

「あの子が持ってたのって……アレと同じだよな？」

「おーい平良！ やべえことになってるな！ マジであの女の子何者なんだよ!？」

「スケさん！ どうするよ？」

信じられないものを見てしまった二人のうち、先に口を開いたのは喜介の方だった。

「平良！ ボクは回り道して車のところまで行く。戻ってくるまでに公園の入り口の車止め引き抜いとけ。お前なら出来るだろ？」

「あの子を置いて逃げるってのか？ そりゃあねえだろ!？」

「本心としては逃げたいけど、中身知っちゃった以上は出来ねえだろ」

自分の言葉に険しい顔をして難色を示す平良に喜介は冷や汗をダラダラ流しながらもハツキリと答えた。

「そうじゃなくてだ。公園の中はまだ逃げてる途中の連中でごった返し。足の遅いガキや年寄りもいる。そいつらをボクらのトラックの荷台に押し込んで纏めて逃がすんだよ、彼女が戦いやすいように!」

「賢いなスケさん、頭良い! それでこそぞだ! 車止めだな? よっしや、任せろよ。コソクリごとだろうと意地でも引っこ抜いてやる!!」

突如として壊された平穏な日常の風景。

けれど、この二人は誰もが自分本位の身勝手になるような、それが許されるような常識が脆くも崩れ去った極限の状況でも怯むことなく自分たちに出来ることを果たそうと勇み足で駆け出す。

平良と喜介を突き動かすのはただ単純に自分たちのバカバカしいようなパフォーマンスで笑ってくれた大切なお客様の一人が、文字通りたった一人で皆を守ろうと戦ってくれていることへの当たり前の恩返しだった。

※

その頃、リューダインとローリーバグラーの戦いは激化が続いていた。

変わらず攻防一体の二槍流で戦いの流れを有利に進めているリューダインではあるが、高い防御力を誇る相手の甲殻の前に決め手を欠けて攻めあぐねていた。

『オ宝を……よこせええ!!』

『きやう!!』

槍撃を受けながらもがむしやらに突っ込んできたローリーバグラーの体当たりを受けてリューダインは軽く吹き飛ばされてしまう。

大きな隙を作ってしまった上にエールスピアの片方を手から落としてしまったリューダインへとローリーバグラーはダンゴムシさながらに丸まって巨大な車輪の如く突っ込んできた。

『不味い……いや、もしかしたら!!』

直撃を受けてしまえば大ダメージは避けられない大技の前にすかさず飛行して回避しようとしたリューダインだったが彼女は何かを閃くと残るエールスピアを真っ直ぐに矢のように敵に向かって投擲した。

『やあああああッ!!』

間髪入れずに彼女は投げ槍を追いかけて駆け出すとエールスピアの矛先が回転突進してくるローリーバーグラーに当たるその刹那の瞬間を狙って石突を思い切り蹴った。

『グヌウ、オオオウワツ!!』

『やった……!!』

力と力がぶつかり合い、火花が火花のように噴き出た末に蹴り込まれたエールスピアの矛先はタガネが岩を割るようにローリーバーグラーの硬い甲殻に穴を穿った。

『このまま仕留める!!』

『……やらせねえよ? カスがああ!!』

好機を作りだして、一気にバーグラーを倒そうとスマッシュボウガンを召喚したリューダインの背中が鋭い一撃で切り裂かれた。

『あ、ぐうあ……こ、の……卑怯者め』

背中中の装甲を痛々しく裂かれて崩れ落ちたりリューダインは軽蔑の眼差しを背後にいたアークスタッグにぶつけた。

『まさか、この間みたいに俺が親切に帰ったと思ってたのか? 帰ってなかったんだよ

なあこれがあ!!』

『ガッ、ハ——!?!』

卑劣にも一度姿を隠して機を窺いながらバーグラーとリューダインの戦いを除き見

ていたアークスタッグ。勝利を前に彼女がほんの僅かに気を抜いた瞬間を逃さず悪辣なる超蟲人は不意打ちを成功させて勝ち誇る。

『キシシシ！ 残念だったよア！ もうちよつとで勝てたのに、こんな狡い手で形勢逆転だ！ 悔しいかア？ 悔しいなア？ 悔しいんだらうけど、俺は可笑しくて腹が振じ切れそうだよオオオオオ!!』

『あ！ がっ！ つ、つうげ!? や、め……おごおあ、ああ』

うつ伏せに倒れ込んで動けないリューダインの脇腹を扶るように蹴りまくるアークスタッグ。目を覆いたくなるような惨たらしい暴力に彼女の口からは踏み潰されたカエルの鳴き声のような苦しい呻きが吐き出される。

『オラ、立てよお？ キシ、シ……今日の俺らはウマイお宝が大量で絶好調なんだ！

もつとお前で遊ばせてくれよ!!』

『お、え、っ!? ハッ……ハア……なんだって?』

鳩尾を拳がめり込むほど殴られてたまらず嘔吐いて悶絶するリューダインはアークスタッグの意味深な言葉に首を傾げる。

『俺たちインセクターにとつてお宝になりそうなものを掻き集めるのは体内でダークラムって栄養源に変換するためだ。なんでこんな大事なことをわざわざ敵のお前に教えてやっていると思う?』

『ぐっあ、あああつ?!』

親指をグリグリと押し込みながらリューダインの首を片手で絞めるアークスタッグ。ひり出すような言葉にならない彼女の悲鳴にアークスタッグは頭部の双角を激しく力チ鳴らして恍惚としているようだった。

『お前ら人間がお宝にしているものは皆目見当が付かねえ。だから、それっぽいのが見つければなりふり構わず分捕るだけだ』

『あぐううう……なにを?』

絞首から解放されたと思えば体勢を立て直す間さえ与えられずにリューダインは後頭部を殴りつけられて無理やりに膝立ちにさせられる。

一方的な蹂躪の前にすでに彼女の体はボロボロになっていた。だが、まだ足りない。とにかくアークスタッグは自分たちインセクターの習性をひけらかしながら、彼女を羽交い絞めにして立ち上がらせた。

『け・ど・な……一つだけ、人間からいつでも確実に奪えるお宝を一つだけ知っている』  
『オオオオオン!!』

アークスタッグがリューダインを颯つている間に復活したローリーバークラーは創造主の目配せに頷くと再び身体を丸めて転がりながら突っ込んできた。その姿を見た瞬間にリューダインにも敵の思惑が理解できて、彼女は思わず全身に悪寒を覚えた。

『や、やめろ！ 放して……このままじゃっ!』

全身が痛みに苛まれて、上手く動かない状態ではあるが最悪の事態を回避しようと無我夢中でもがくりューダインだが無情にもアークスタッグの拘束は微塵も緩まない。

そして、大地を砕きながら自分に向かって迫る破滅の車輪の圧を彼女はすぐ近くに感じ取ってしまった。

『お前から人間の悲鳴と恐怖はインセクターの最高のお宝なんだからえええ!!』

『いぎっ、ひぎいいいい!!』

耳を塞ぎたくなるような少女の悲鳴が公園中に木霊した。

滝のような火花を噴き上げて、高速回転する死神の車輪が容赦なくりューダインの全身に押し付けられているのだ。ガリガリ、ゴリゴリと装甲が削り砕かれて尋常ではない激痛が彼女を支配していく。

『ああああああああああああああ——!!?!』

『キヒ、キヒヒ……ヒヤツハハハハ!! 良い声ありがとうねえ!!』

車輪状態のローリーバーグラの攻撃は素肌に研磨機を押し付けられるような気が狂ってしまったても可笑しくない痛みを彼女に与え続ける。

壊れたスピーカーのように悲鳴を上げ続けながら、指先を時折ビクン、ビクンと痙攣させて悶絶する彼女の凄惨な姿にアークスタッグは高笑う。

不快で厭らしい異形の笑い声が懸命に戦いながら卑劣の前に絶望へと突き落とされた少女の絶叫さえも塗り潰していくようだった。

「う、あ……ああ……」

『まだ壊れてないのかよコイツ？ キシシ！ どれだけ遊び甲斐のある玩具なんだよ？ ええ、最高じゃねえかよ？』

変身が解除されて元に戻ってしまったクリューは頭や口元から血を流してぐったりと倒れ込んだ。アークスタッグの嗜虐のままに痛めつけられたその姿は一日中踏みつけられてグシャグシャになった人形のようにポロポロだ。

そして、さらに悪いことにリユードインに変身するために必要不可欠なウエイクアンバーが先程のローリーバーグラの攻撃によって大きくヒビ割れてしまっていたのだ。

「ま……まだ、あきらめたり……するもんか」

『あ？』

逃げることも、変身して反撃することも叶わない。

迫りくる死を待つだけのような絶体絶命の状況でクリューは呼吸をするのも苦しいはずなのに、か細い声を振り絞ってアークスタッグの足を掴んだ。

「平和を守るために戦う。正直、ずっと言葉では分かっていたけど……私の中であやふやだったその意味を、今日……たくさんの人たちが笑う姿をみてちよつとだけ分かった



んだ」

『なに言ってるんだお前？ 心の方はブツ壊れてたか？』

「漠然としか受け止めていなかった守らなきゃいけない、平和のかたち……やつと少し分かってきたんだ。だから……わたしはまだ、終われないんだ」

クリューはうわ言のように今日という一日で触れたたくさんの大切なモノを噛みしめて自分を奮い立たせていた。

ボロ雑巾のような惨めな姿で、咳き込んで微かに血反吐を吐きながら、壊れたブリキの玩具のようなぎこちない動きでクリューは意地だけで自分の体を動かしてアークスタッグたちに食い下がろうとしていた。

『そういうの、鬱陶しいんだよ。もつと遊んでやろうと思ったけどやめだ。首でも刎ねて黙らせるわ、お前』

そんなクリューの態度が癪に障ったアークスタッグは彼女の髪を鷲掴みにして持ち上げるとクワガタの角に似た曲刀を手から生成すると躊躇い無く振りかぶった。

「なにやってんだ。てめえ？」

『ああ？』

だが、アークスタッグの曲刀がクリューの首筋に届くことはなかった。

何度力を込めても動かさない自慢の得物にアークスタッグが不審に思い始めた時、そ

の背後から若い男のひどく抑揚のない声が聞こえた。

「ムーン!!」

『へ……い、ぎ……ぎやあああ!!』

アークスタツグが後ろを振り返り、憤怒の顔をした金髪の筋肉質な人間を視界に入れた瞬間にその右目には容赦なくさっきの戦いでリューダインの手から落ちたもう一本のエールスピアが突き刺さった。

クリューを救った第三者による攻撃。

それは喜介と協力して逃げ遅れた人たちを避難させながら、様子を見に舞い戻ってきた平良の怒り心頭の一撃だった。

『目ええ!!? 見えないツ、見えないぞ!!? おお俺の目があああ!!?』

「目ん玉片方潰されたぐらいで悲鳴上げていい身分じゃねえだろうが……!!?」

曲刀の刃を掴む手が裂けて鮮血が滴り落ちようとも平良は握る力を緩めることなく、そのまま右目に刺さった槍に恐慌状態に陥っているアークスタツグを一本背負いで力任せに投げ飛ばした。

『に、人間か!!? た、たたた只の人間がやりやがったのか? こんな安っぽい槍で、この俺の目を潰しやがったのか!!?』

突然の攻撃による右目の喪失。

屈辱と痛みで狂ったように喚き散らすアークスタッグを尻目に平良は倒れているクリューを抱き上げて一端異形の怪物たちと距離を取った。

「おいクリュー！ 生きてるか！」

「たいら？ だめじゃないですか、逃げてっていったのに……」

「おバカ様ですかお前は？ こんな大惨事、クリュー一人に押し付けていいもんじゃないだろ」

自分を助けてくれたのが誰なのか分かったクリューは弱々しい声で言う。こんな酷い怪我を負ってもまだ自分に課せられた使命を果たそうとする彼女に平良は震えた声で窘めた。

「押し付けていいんです。私はそのためにずっと鍛えて、稽古して……だけど、あんなに頑張ったのにいまの私は不甲斐なく負けて、平良のことを……みんなのことを危険に晒してしまっています」

「それはそれ、これはこれだ。お前にはやらなきゃいけないことがあるんだろってことは分かる。だけど、俺たちには俺たちの意地とか色々あるんだよ」

「たいら……泣いてます？」

まだ無事な柔らかな芝生の上にそつとクリューを寝かせると平良はゆらりと立ち上がった。その顔を霞んだ視界で見たクリューは思わず驚いて目を丸くした。

「泣いてない。けど……泣きそうなくらいに、俺はいま怒っております」

ギリギリと砕けてしまいそうなほどに歯を食いしばって、爪が肉に食い込むぐらい拳を握り締めながら平良はいまにも大泣きしそうな勢いで蒼い瞳を充血させて涙ぐんでいた。

「クリュー……お前が背負っている物の大きさとか重さとか俺は全然分らない。だけど、いまこの公園で大変なことになっているのは居合わせた俺たち全員の問題なんだよ。だから……クリューが一人で何とかしようと思わなくてもいいんだよ」

「そういうわけにはいきませんって、何度も言ってるじゃないですか。たいらのほうこそ大バカです。日本人なのに日本語わかってないでしょう」

「——かもな。だから、いまだけでも勝手に肩代わりさせてもらうぜ？」

「え……？」

「半分なんて偉そうなことは言わねえよ。三分の一にも満たないかもしれないけども——こんなになるまで頑張ったクリューの努力を無駄になんてさせるもんかだ」

「平良……あなたは」

「それにだ！ せっかく楽しそうに笑ってもらえた大切なお客には、最高のアフターサービスをするのがプロってもんだろ!! スケさんの受け売りだけだな」

言いたいことを言い切って、伝えたい気持ちを矢継ぎ早にクリューにぶつけた平良は

背後から迫る殺気のような物を感じて、スウッと息を強く吸い身構えながら振り向いた。

『シヤアアア!!』

「ぐおっ……フンヌ!!」

怒り狂ったアークスタッグは何が何でも平良を殺そうと尖った指先を突き立てて、襲ってきた。ギリギリでその異形の腕を両腕で受け止めた平良だが流石に相手の力の前には一歩及ばず、緑色の爪先が逞しい大胸筋に突き刺さり、Tシャツを血で濡らす。

『殺す！ 殺す殺す殺す！ 引き千切って、斬り殺して、八つ裂きにして、殺してやる!!』  
「全部ほとんど意味一緒じゃねえかよ！ さてはバカだなお前!!」

『カスにも劣るゴミ虫があああ!!』

「虫は……お前だろうよおおお!!」

平良は無自覚にアークスタッグを徹底的に煽り倒して冷静さを失わせると渾身の右ストレートを叩き込んで僅かに後退させることに成功した。

よろめくアークスタッグが持ち直す前に一目散で駆け寄るとその足首を掴んで常識外れの力を存分に発揮して見た目以上に重量のある異形を別方向から襲い掛かろうとして来ていたローリーバーグラーにぶつけるように投げ飛ばす。

「俺のお気に入りの大胸筋が……やってくれたじゃねえか!!」

自慢の筋肉に傷を付けられた平良は外道の限りを尽くすインセクターに怒りを更に倍増させて、今のままではまるで勝ち目のない相手に一切怯むことなく立ち塞がった。

アークスタッグたちが本気で襲いかかってくれば、おそらく一分も持たずに殺される紙一重の状況で幸運の女神が微笑んだのか平良が待っていた最高の相棒の到来を知らせる聞き慣れたエンジン音が近付いてきた。

「平良あ！ 生きてるか!？」

「スケさん！ ミラーに吊ってる俺のお守り投げてくれ!!」

「お前……いや、物は試しだ！ やってみる!!」

公園内に入り込んだ喜介の運転するトラックが平良のすぐ傍で停車する。

その呼び声に僅かに首を傾げた喜介だったが彼もまたクリューが変身する瞬間を目撃していたこともあり、平良の大博打の内容を理解する。そして、正体不明のウェイクアンバーらしき琥珀をすかさず相棒に向かって投げた。

「クリュー、悪いけどこれちよつと借りるぞ」

「無理ですよ。それだけじゃ……意味がないんです。ウェイクアンバーがないと、つ……ない?」

にはあつと不敵な笑顔を浮かべて自分が持っている物をアピールする平良に、クリューは一瞬だけ痛みも忘れて啞然とした。

「俺の筋肉は誰かを乱暴したり、悲しませるためにあるんじゃない、笑顔にさせるためにあるんだ」

腹を括ったかのような据わった目つきで平良はサーチドライバーを腰に巻きつけるとクリューの動きを真似て荒っぽく彼自身が持っていた謎のウエイクアンバーをスロットに装填した。

「テイラノ！ アメイジング・デイスカバリー!!」

「だけどなあー！ 辛そうな顔してまで、めちやくちや頑張ってる誰かの笑顔を取り戻すためなら、喜んで暴れるために使ってやるよ！ 俺の筋肉……俺の命も、ありったけ全部だ!!」

恐怖も、不安も、信条に背く後ろめたさも——いまだけは全部ぜんぶ嘔み砕いて平良は自分という存在の芯から戦意を呼び覚まして叫ぶ。

「変身だあああッ!!」

「マイルオン！ ウォーレックス・アクション!!」

バックルに装填されたウエイクアンバーから確かに響き渡った電子音声。

その瞬間に強く眩い白い光がベルトから溢れると白いアーマーを纏ったメカニカルなテイラノサウルスが平良の目の前に召喚されると大地を震撼させるような咆哮を轟かせながらバラバラに飛び散り、彼の体に戦うための鎧のパーツとなって装着されてい

く。

『かあく、頭痛つてえ……ドンパチだらけの120分ぐらいするアクション映画を5分で観せられた気分だ。けど、なんかなかったみたいだな!!』

「できちゃった……平良が変身しちゃった?」

光が収まっていく中で脳内に流れ込むスペックデータに堪らずふらつきながらも、得意げに拳を握る竜の仮面を纏った白き戦士の姿にクリューは呆然とするしかなかった。

『お前はなんだ?! 敵か、敵なのか!!?』

『それ以外の何だつてんだよ? ああ、何か分かんねえけどいまの俺はウォーレックスつて名前らしい。もう少しの付き合いだと思うけどよろしく覚えておいてくれよ!!』  
予想もしない新たな戦士の出現にうろたえるアークスタッグに平良だった竜の鎧を纏う存在は逆る闘志を隠すことなく答えた。

黒いアンダースーツの上からまるでどんな悪意にも汚れず染まらずと言わんばかりの不屈の戦意が滲み出ている白亜の装甲を全身に纏った猛々しいマツシブなフォルム。

両肩を覆う恐竜の爪のように角張った鎧には中央から青いギザギザのスリットが迸っている。更に胸部の装甲は逞しい大胸筋がそのまま鋼に変わったかのようなゴツゴツとした無骨な見た目をしていた。

一際目を引くのは両腕の前腕部に籠手のように装着された黄色と黒のラインが走る



円筒型のタービンのような形をしたオーラム・デイスチャージャーと呼ばれるマルチウエポンだ。

そして、極めつけは肉厚の刃のような一本角を持つ大顎を開いたティラノサウルスを模ったフルフェイスの仮面と鋭く眼光を放つ紺碧の複眼だ。

これこそが恐竜界の猛者たるティラノサウルスの力を宿した不撓不屈なる白亜の竜騎兵——ダイナメル・ウォーレックス!!

後に悪しき災厄たちから世界の平和と自由を人知れず守る無貌の戦士・仮面ライダーという名の都市伝説となる存在である。

『とりあえず、これはクリューにやった胸糞悪いこと全部への最初のお礼だ!!』

『ぶっこばあああ!!』

猛々しく重厚な外観からは想像できない強靱な脚力の踏み込みからアークスタッグに瞬く間に肉薄したウォーレックスの拳が炸裂する。爆弾が爆ぜたような音を鳴らしてアークスタッグは鎧のような甲殻の一部を破損させながら吹き飛ばされた。

『俺はやるぜ? 俺はやるぜ!!』

宣戦布告の一撃を決めたウォーレックスは自分を鼓舞し、相手を威嚇するように大胆不敵な態度で宣言する。そして、両腕を今まさに獲物に噛みつかんと大顎を開ける恐竜のように構えてローリーバードと対峙した。

戦いの刻は来た。

白鋼の戦竜はこうして荒ぶる雄叫びを世界に轟かせた。

## レコード：02 白鋼の戦竜 ②

竜と蟲の咆哮が轟く。

荒れ乱された都市公園の一角を戦場にして、ウォーレックスとローリーバグラーは真正面からぶつかり合うとそのまま激しい肉弾戦へと移行する。

『お宝を！ 恐怖を！ モット欲しい！ まだまだ足りぬウウ!!』

『足りないだあ？ あれだけやってもか？ 卑しいったらないぜ——ぎげんな!!』

両者の拳がぶつかり合って大気がビリビリと震える。

堪らず一歩後退するバグラーに対して、ウォーレックスは形振り構わず前進しながら拳を握り締める。小細工抜ききの殴り合いを繰り広げる白き竜騎兵と橙色の蟲人。双方共に怪力自慢のインファイトの応酬は見る者を圧倒した。

先手を取ったのはローリーバグラーだ。その場で丸まって体当たりを食らわせてウォーレックスを怯ませると両腕を大振りして無数のリングをその全身に浴びせる。

直撃すればコンクリートも容易く砕くりングの雨霰を食らったウォーレックスは全身から火花を飛ばすが硝煙を払い除けて前進する。

散弾銃による射撃を思わせる攻撃を何度受けても怯む様子を見せない相手の鬼気迫る姿にローリーバーグラーが僅かに恐怖を抱いた瞬間にウォレックスの攻撃が異形を捉えた。

『だらあああああ!!』

『アギイ!?!』

リングを投げ放った瞬間の伸びきった右腕を挿んだウォレックスはローリーバーグラーを引つ張り寄せながら空いた片腕による全力の拳打を叩き込んだ。

吐き出すような悲鳴を上げるローリーバーグラーの硬い甲殻で覆われた胸部が凹んだ。そのままウォレックスは両手で握り拳を作ると敵の側頭部を左右から挟み込むように思い切り諸手打ちを決める。

『二度と丸まれないように平たく叩き潰してやらあなあああ!!』

『ツツアアア——!?!』

破片のようなものを飛び散らせて顔面がひしゃげたローリーバーグラーは絶句する。恐ろしい攻勢に後ずさるがウォレックスは逃亡など許さないと大樹を伐るような豪快な回し蹴りを背中に打ち込んで大地に叩き落とした。

『覚悟しやがれよ? お団子から五平餅に作り直してやるから——ぬおツ!?!』

死角から急接近する別の存在にウォレックスは攻撃の手を止めて両腕を盾のよう

に構えると深緑の曲刀が凄まじい力で叩きつけられた。

『キツシヤアアア！ 粋がるなよ、下等生物が！』

不意打ちをするほどの心のゆとりもないのか、殺意を剥き出しにして襲い掛かってくるアークスタッグ。得物こそ曲刀だがその攻撃は斬るというよりは相手を殺せれば何でもいいとばかりの力任せの殴打に等しい。

『お前を殺したら、次はあの雌だ。もうアレで遊ぼうだなんてつもりはねえ！ 腹でも裂いて生きたまま腸を掻き出してじつくりと殺してやるよ！』

『ぐうツ……お前は本当に、他人にご迷惑をかけねえと笑えないと見えるな！』

恐るべき膂力から繰り出される連撃にウォーレックスの口から重苦しい息が漏れた。だが、どんな猛攻に晒されようともその両脚が後ろに下がることは決してない。

相変わらず暴力と嗜虐しか頭にならないような不愉快な言葉を羅列して唾うアークスタッグにウォーレックスは血液を煮立たせるような怒りを燃え上がらせて反撃を試みる。

『我が主！ さあさあ！ どうか、更なる破壊を！ 更なる暴虐を！ 更なる強奪を!!』  
『のおおっ!? いいぜ……二匹ともまとめて掛つてきやがれですだあ!!』

だが、アークスタッグの攻撃を弾いて殴り返そうとしたところで今度は反対側から車輪状態のローリーバグラーに追突されて大きくふらつく。

一対一ならまだ望みはあったが歴戦の戦士でも無い平良が変身するウォーレックスは二体総出で仕掛けてくるインセクター相手に苦戦を強いられる展開となっていた。

その動きは戦士としての高い質の持ち主だったクリューと比べるとあまりにも拙く、素人のそれだ。パワーや防御力は高いが動きに無駄が多く、荒削りで気合の叫びで誤魔化してはいるが経験不足が滲み出ている。

しかし、明らかな不利な状況にもウォーレックスは怯むことなく自身の肉体を頼みに気合を入れ直すと我武者羅に異形の怪人たちを相手に立ち向かっていく。

※

その頃、街中に密かに設置された監視システムからインセクターの襲撃を察知した吉家たちアナザーアルゴの面々もまた現地にシャロンを派遣すると同時に戦いの様子をモニタリングしていた。

「ご主人……あの推定190cm、髪は金、筋肉モリモリマッチョマンの一般人が変身した戦士は？」

「ボクにも分かりません。インセクター以上に正体不明のイレギュラーですよ、彼。そもそも、どうしてウェイクアンバーを個人が所有しているんだ？」

「現在映像を元にリアルタイムであるダイナメイルを解析中ですが先日奪われたものは明らかに違うようですね」

目覚めの森の博物館地下に設けられた司令室では負傷したクリューを心配する声も当然ながら、謎のダイナメイル・ウォーレックスとその変身者である平良のことで騒然としていた。

常日頃にこやかで気品のある立ち振舞いがデフォルトであるしおんでさえ、薄らと冷や汗を浮かべて取り乱しているのがそれを物語っていた。

特に吉家は指揮官という立場から平静を装ってはいるものの、長い年月をかけて世界中を探し回っても数えるほどしか集めることが出来なかったウエイクアンバーを何の変哲もない青年が持つていたことだけでもかなりのショックを受けていた。

「彼が何者なのかはこの際度外視でも構いません。いまは彼に勝って、生き残ってもらわないと」

「盗難品を基に犯人が違法製造した最新モデル、というわけでもないようですし……個人的には、こういう言葉を用いたくはありませんがまさに不条理の塊としか表現できませんねえ」

「……それだ!」

「はい? ご主人、私なにか不躰なことを言ってしまったか?」

「その逆ですよ、しおんさん。ええ……まさにその逆の可能性がまだ残されていました」  
事後処理部隊への指示を送りながら固唾を飲んで戦いの様子を見守る面々。しおんがふと平常心を整えようと冗談半分に呟いた言葉に閃いた吉家は大急ぎで端末から竜童家の個人的なデータベースにアクセスして何かを調べ始めた。

「やつぱり……あった。しおんさん、このデータをアナザーアルゴのデータベースに移植および更なる解析をお願いします」

「おやまあご主人。これ、一体どこからお取り寄せしたのです?」

吉家の手でモニターに映し出された年季のあるデータ資料にしおんたちは驚いた。そこには不明瞭な部分も多いが間違いなく、いま都市公園で戦っているあの正体不明のダイナメイルが記されていたのだ。

「初代司令の私的な端末の中に隠してありました。見つけるのは思いの外簡単でしたけどね」

「曾祖父様の?」

「悪戯心とかなら洒落になりませんよ。アナザーアルゴの記録には古く価値のないものとして廃棄処分扱いにしていたんですから……まるで宝探しの賞品でも見つけた気分です」

「それであるダイナメイルの正体というのは?」



肝心の答えをせかすしおんに吉家は一呼吸して気持ちを落ち着かせるとウォーレックスの出自について語り始めた。

「盗難品でも、違法コピーでも、最新型でもありません。あのダイナメールこそが全ての始まりだったようです」

「それは……いえ、そんなまさかでしょう？　それではあのウォーレックスという存在はプロトタイプとでも？」

「はい。在るはずのなかった空白の竜の鎧。ダイナメール・ゼロ。それがあのウォーレックスのようです」

吉家の言葉に司令室内に詰めていたアナザーアルゴの面々はざわめいた。

プロトタイプ——その響きにある者は未知数の可能性を信じて一縷の希望を抱き、またある者は頭を抱えた。そんな骨董品に何が出来るのかと。

その中でも吉家に胸中に渦巻く疑問と不安は大きかった。

一族の間である自分にすら教えられていなかったプロトタイプの存在とそれを持っていた謎の青年。

様々な人間の思いや疑惑を受けながらモニターの向こう側の白亜の竜騎兵は獣のよ  
うな雄叫びを上げて果敢に戦い続けていた。

※

都市公園にはまるで調子の悪いモーターのような耳障りな羽音が鳴り響いていた。

そして、白昼の大地を気味悪く照らす謎の強い光もまた羽音と重なり不快な二重奏を奏でている。

『キヒヤツハハハ!! 俺はこういうことも出来るんだぜ? どうだよ、手も足も出ないだろう?』

『次から次に妙なもん出しやがって……虫が鬱陶しくなるのは夏場だけで十分なのによ』

『オ、オオ……オ宝を我にヨコセエエ!!』

『てめえの方はそれしか言えねえのか、ったく!!』

けたたましい音と光の正体は背中の中ので飛翔しながら、頭の角から濁った緑色の破壊光線をウォーレックスに浴びせるアークスタッグの仕業だった。

地上からはローリーバーグラが依然としてダンゴムシ特有の丸まった形態からの強烈な体当たりを仕掛け続けて、ウォーレックスの白亜の装甲には汚れや傷が目立ち始めていた。

一方的な颯り殺しにされまいと必死で食い下がるウォーレックスは譲れない意地が

あるのかどんなに攻撃を受けようと決して悲鳴や弱音だけは吐かずにギリギリのラインで二体の怪人と渡り合っていた。

「うわつと、あつぶない!? こりゃ、ボクらも避難しないと流石にヤバいな」

ウォーレックスに変身した平良の戦いをずっと見守っていた喜介の近くに戦闘の余波で破壊された遊具の破片が吹っ飛んできた。一瞬で滝のような汗を噴き出しながら目を泳がせる喜介はこのままでは自分の命が危ないし、何より平良の足手纏いになってしまふと気の乗らない決断を迫られていた。すると、喜介に背負われていたクリューがまだ辛い痛みには耐えながらあることを呟いた。

「うっ……私を下ろして平良と一緒に行ってください。使えるアンバーがあるなら、戦える」

「笑えないジョークだね。ボクは自分のことが一番大事なタイプの人間だけど、そんなナリの女の子を置き去りにして逃げるほどしょっぱい奴じゃないよ」

「あれは……あいつらと戦う事は私の役目なんです。だから——!」

「責任感が強いのは良いことだけど、いま君がすることはそれじゃないんじゃない?」

ハッキリ言っちゃうけど、そんな怪我した状態で勝てるわけじゃないでしょう」

額の血を拭って自分の背から降りようとするクリューを逃さないとばかりに、喜介は腕に力を込めた。

「信じて見守るのも、戦いの一つだと思えばボクはさ？　それで勝った平良にスマイルの一つもしてあげてよ。あいつ、安上がりな奴だからさ」

「そんなこと……それに平良は私のように修練も戦う術も心得ているわけじゃないんでしょ？」

「どうかな？　どうだろうね？　けど、一つだけ平良の相棒として良い情報を教えてあげるよ」

平良を守るための守り手、力なき人々を守るための守り手——それが自分なのに、知り合ったばかりの無辜の人間にそれを押し付けてしまっている自分にクリューは悔しさと罪悪感で押し潰されそうな気持だった。

だが、彼女の曇った表情を知ってか知らずか遠方にて、気合だけは負けないと大声を張り上げて奮闘するウォーレックスに喜介は勝ち気な視線を向けた。

「あいつはバカだけど、気持ちの良いバカさ。だからね、せつかく笑ってくれた君をつまんない嘘で悲しませたりはしないんだ。平良はやってってくれるよ？」

「喜介……」

「おーい、平良あああ!!」

自分のことのように得意げに話す喜介にクリューは思わずぼけつと呆気にとられた顔をした。期待通りのリアクションをする彼女を小さく笑って、喜介は平良に届くよう

に大声を上げた。

『どしたよ、スケさあん！ ご覧のとおりの大忙しなだけとお？！』

「悪いけど、ボクはこれ以上はこの場にいられない！ うっかり死んじゃうからねえ!!」

『だろうな！ スケさんは賢いぶん、マツチ棒みたいに繊細なんだもん!!』

「お前が丈夫すぎなだけだつて！ ボクはクリューを連れて公園の外ですつと待つてるから、思う存分暴れてやれ!!」

アークスタッグとローリーバーグラの猛攻を凌ぎながら声に耳を傾けるウォーレックスに喜介は内心恐怖や不安でバクバク暴れる胸の鼓動を抑えながら、にんまり笑つて言葉を届ける。長い付き合いだからこそ分かる、相棒が最大限にやりやすく立ち回れるであろう励ましの言葉だ。

『ハハツ……良いんだな？ 俺の筋肉を遠慮なくやんちゃ少年みたいに弾けさせちゃつてもお構いなんだな!』

「ああ——やつてよしッ!! そいじゃあね!!」

『かしくまあああ!!』

細かな説明などしなくても伝わる言葉でズバツとエールを送ると喜介はまだ不安な顔で何か言いたげな背中をクリューを巻き込んで一目散に走つて戦場から離れていった。

『本当にスケさんはお見事だぜ……なら、俺もやるときはやるってところお見せしないとな!!』

勝って戻って来い。

喜介の真意を受け取ったウォーレックスは気合を更に上乗せして全身の筋肉に大号令を呼び掛ける。

『なにをゴチャゴチャほざいてやがる!!』

『フウンッ……まだまだア!!』

『オオオオオン!! 潰れロオ!!』

苛立った叫び声を上げながら上空から急接近してきたアークスタッグがウォーレックスの顔面目掛けて激しい連続撃を浴びせる。それに呼応して、ローリーバーグラーム丸まって高速で転がって真っ向から追突してくる。

常人なら瞬く間にバラバラの肉片に砕け散ってしまっても可笑しくはない破壊力の洗礼をウォーレックスはまともに食らいながらも尚、一步として退かずに立ち続ける。

『フウウウウ……そいつがどうしたあ!!』

『この下等生物があ! ム力つくぜ、痛みが無いとでも言いたいのかよ!』

『どうだろうな? ないかも、だ』

痛み? あるに決まってる。痛いのは好きじゃない。いくつになっても慣れないも

んだ。

怖さ？ 滅茶苦茶怖いわ、このおバカ野郎め。正直、自分一人なら小便漏らしてる。だけど——あの子はどうだった？

クリューだって、怖いはずだ。痛かったはずだ。

でも、彼女はめちやくちや頑張ったんだぞ。

『せっかく、いい顔で笑ってたのによお……ッ!!』

まださっきの彼女の痛みに苦しむ叫びが耳にこべりついて剥がれない。

血を流して、辛そうに顔を歪めて、それでもなんか立派なことを言いながら、人間の悲鳴や恐怖が宝だなんてほざく化け物どもに立ち向かおうとしていた痛ましい少女の姿が脳裏に焼き付いて離れない。

『何だかんだで俺の筋肉もスケさんが考えた渾身の芸も見事にたい焼き一個に負けちまってたわけだけど、でもそんなのでもいいさ』

客席に独りでぽつんと突っ立って、なんだか息苦しそうな顔をしていた少女。

たかがたい焼き一つであんなに無邪気に喜んで、夜空の星みたいキラキラと笑っていい顔していた女の子がよお——あんなひどい目に遭いながらも泣き言一つ漏らさず に必死に頑張ったんだぜ。

『あんな良い笑顔されたらよ、幸せ感じてるんなら何だっいいやって思うじゃねえか。

だけど……それをためえら、ふざけた理由で台無しにしやがったよな?』

お前は どうする、鳴上平良?

俺は どうしなきゃいけない、俺?

あんなに頑張ってたクリューの痛みも、勇気も、笑顔も——全部ぜんぶ、俺で台無しにするのか?

『さつきからブツブツと耳障りなんだよ! もう死ぬよゴミカスがああ!!』

『ためえらなんかを好き放題にしたまま終わっちゃったらよ! あの子が背負ってる大事なモンつてのを肩代わりするだなんて、口が裂けても言えねえだろうがよおお!!』

『ガッバ、アア……アア!』

怒りを超えた強い想いに満ち溢れた咆哮を轟かせながら、ウォーレックスはアークスタッグの蹴りを掴み取り、またローリーバークラーの突進も片手で受け止めるとあべこべに吹っ飛ばした。

『もつともつとオオオ!! みなぎれ俺ツ!!』

その瞬間にウォーレックスの裂帛の気合に呼応して両腕のオーラム・デイスチャージャヤーが唸りを上げて高速回転を始め出した。

『ソオウリヤ!!』

『ぶおっ!!? な、なんだ……雷? 晴天の白昼にだあ!』



立ち上がりかけのアークスタッグの顎下をウォーレックスの鉄拳が打ち抜くと同時に青白い雷光が迸り、痺れを伴った焼けるような痛みを加える。

『ガンガンいくぜえええ!!』

『こ、こいつの仕業か?! おつこお、おおつ?!』

アークスタッグの腹部に一心不乱に拳の嵐を叩き込むウォーレックスの両腕にはタービンの高速回転から生み出された雷電が纏われていた。これこそがオーラム・デイスチャー・ジャーの真の能力である。

超硬度のタービンはその回転を時に攻撃に、あるいは防御に活用するだけでなく追加のエネルギーを生成する。この雷電の正体は変身者である平良の意思でダイナメイルのエネルギーであるダイナオーラムを電気エネルギーに変換して戦闘に転用しているのであった。

『ゼエ……ハア……ふざけやがって! この俺が、インセクターがこんな下等生物に後れを取るわけがない!!』

『いいぜ? 俺ももう出し惜しみは無しだ』

サンドバックのように滅多打ちにされて大きく疲弊したアークスタッグだったが自らの尊厳に大きな傷を付け続けるウォーレックスに憎悪を更に膨らませると再び角からの破壊光線を仕掛ける。



豪快だが的確な動きでウォーレックスは相手の攻撃を弾きながら、カウンターを次々と決めていく。その動きは戦いが始まった頃とは段違いに洗練されている。

『回ればすげえのはな！ お前だけじゃないんだぜ!!』

雷撃を纏った打撃技サンダースパートでローリーバーグラを一気にグロッキーになるまで叩きのめしていくウォーレックス。

僅かな間での戦闘スキルの向上は平良の成長性の目覚ましもあるが実際のところは彼が周囲に余計な被害を出さないように全力を出すことに無意識の抵抗に近い遠慮をしていたことが大きい。

生身の頃から備えている己の奇異なほどの力が周りに迷惑をかけないように戒め縛っていたのを先程の喜介の声援とクリューの戦いを無駄にしてはならないと自分を奮い立たせて枷を外したことで爆発的に本来の力を発揮し始めたのだ。

それは平良自身の技量だけでなく、ダイナメイル・ウォーレックスに搭載された人型城塞さながらの桁外れの戦闘力も例外ではない。

『フンヌツ！ 捕まえたぞ!!』

『ルオオオオラアア……アア!!?』

『熱烈的だろ！ 俺のファーストハグだぜ、堪能してくださいませよ!』

完成度の高い攻防一体を実現しているローリーバーグラの車輪攻撃が再びウォー

レックスに直撃する。しかし、邪魔なアークスタッグが不在のいまこの攻撃はウォーレックスにとつて別段脅威ではなかった。

攻撃を真正面から受け止めると両腕を回し込んでベアバッグよろしく全身全霊で抱き絞める。すると車輪の回転はウォーレックスの両腕の絞めつけに動きが止り、押し潰されそうな怪力に耐え切れなくなったローリーバグラーは苦しみながら人型に戻った。

『いまの俺はこういうことも出来るんだぜ!!』

身体を真つ二つに押し折られかけて、ふらついているローリーバグラーを蹴り飛ばして間合いを取るとウォーレックスはタービンを高速回転させた状態で五指を開いた両手を胸の前で構える。スパークを起こしながら激しい雷電がその両手の間に収束されていくとやがて巨大な雷の球体が出来上がった。

『煌めけ! ライトニング・キャノンボオオオル!!』

『オ、グツギガガ、ガガ!?!』

発現させた大雷球をウォーレックスは片手持ちで振りかぶると至近距離から勢い良くローリーバグラーに叩きつけた。瞬間、鋭く大きな炸裂音と共に稲妻が地上に飛び散って周囲は真つ白に照らされる。光が消え去るとその光源には黒コゲになったバグラーが棒立ちになって痙攣していた。

『そろそろ幕引きつてとこか!』

勝機を感じとつたウォーレックスはベルトの左サイドにあるボタンをタップ。するとバックルに装填されたウェイクアンバーから光と共に護拳があらわれた剣の柄が出現する。

『オオオオオ!! お目覚めの時間だぜツ! テイルデストロイヤアアアツ!!』

ウォーレックスは左手でしっかりと柄を掴むと迷い無く光の鞘から自らの得物を引き抜いた。姿を現したそれは刀剣と呼ぶにはあまりにも頑強で無骨だった。

柄を含めて全長1.5cmはあろうティラノサウルスの尾を模した六角形の金砕棒型の武器。それがウォーレックスの専用武器の一つであるティルデストロイヤーだった。

豪快な横薙ぎの一撃が重厚な体躯を持つローリーバグラーの体を案山子のように軽々と吹っ飛ばす。

『俺ながら執念深いと思うけど、きっちりクリューのリベンジはやつとかないとだ!!』

自分で吹っ飛ばした敵を追いかけて力強く駆け出したウォーレックスは片手で構えたティルデストロイヤーの柄元に搭載されたトリガーを引いた。すると重さと硬さの化身さながらの刃なき刀身がドリルのように高速回転を始めて、激しい螺旋を描き始めたのだ。

『ウリヤアアア!! ソラソラソラアアア!!』

『ガッ——!?!』

唸りを上げて振り下ろされたウォーレックスの一撃をローリーバーグラ―は本能的に両腕で受け止めるがドリルの如く超回転をする刀身に硬質のリングで覆われた腕は容易く抉り砕かれていく。

ガードが崩れたローリーバーグラ―に炸裂する三つの太刀筋はいずれも信じられないうぐらい重く強烈だ。そして、攻撃の重さから推察するにテイルデストロイヤーそのものが相当な重量の武器のほすなのに担い手のウォーレックスはデツキブラシでも操るかのようにな軽々と振り回してくるのだから敵対する者は例え怪物であろうと恐怖を覚えてた。

『手に馴染むいい感じの重さだぜ! 暮らしの一部ってやつだ!!』

『ウボオツア!?!』

『もらった——ツ!!』

大きな音を立てて空気を裂きながら振り上げられた一閃がローリーバーグラ―を宙にカチ上げた。機を見出したウォーレックスは滑らかな動きでテイルデストロイヤーをくるりと逆手持ちに握り直すとそのまま一気にガラ空きになったローリーバーグラ―の体に突き立てる。

『アギギツギギギギギ——!?!?!』

『破り穿て! オーラムデストロイヤアアアッ!!』

鼓膜をビリビリと震わせる破砕音と火花が渦巻く中でウォレックスはベルトのグリップを捻った。するとウェイクアンバーから流れ込んだダイナオーラムに満たされたテイルデストロイヤーは鮮やかな輝きを放ち、更なる破壊力を解放するとついローリーバーグラアの胴体を硬い甲殻諸共に串刺しに貫いた。

そして、静かにウォレックスが得物を引き抜き残心をするとその背後でローリーバーグラアは爆発して散った。

『だっはー……勝てたじゃん、俺』

特大の安堵の息を吐き出したウォレックスは急に静かになった都市公園を見回して仮面の奥で思わず頬を引きつらせた。

三者が遠慮なく大暴れした結果、広大な面積を誇る公園の半分が見事なまでに更地に近い荒野に変わり果てていたのだ。

『これ、全額弁償はないよね? 修理するの手伝うとかで許してもらえるよな』

戦い直後ということもあり悪くない気分の高揚感を残しつつ、奇しくも手に入れた力の強さにウォレックスが絶句していると日が暮れかけた茜色の空にあの耳障りな翅音が聞こえてきた。

『やりやがったな！ このムカつく下等生物めが！ この恨みは忘れねえぞ？』  
『てめえ……』

ウオーレックスが翅音のする方角を見上げるとそこにはローリーバーグラの爆散の衝撃で目を覚ましたアークスタッグが空の上で憎しみに満ちた表情で自分を睨んでいる姿があった。

『あの雌のガキ共々……必ず俺が斃り殺しにしてやる！ その日を待っていやがれよ！！』

そんな捨て台詞を残してアークスタッグは背を向けて飛び去っていく。

だが、このインセクターはこれから待ち受ける思いもよらない自分の運命をまるで知らなかった。

『おい』

『イギ——ッ!?』

夕闇に飛んでいこうとしたアークスタッグの背中に地上から飛来した漆黒の塊——石のように投げ放たれたテイルデストロイヤーがぶち当たった。くの字になるほど仰け反つてから、まるでハエ叩きで潰された害虫のように墜落したアークスタッグは引きずり降ろされた地上で信じられない光景を見て考える思考を失った。

『誰が、てめえ独りだけ……帰っていいだなんて言ったよおおお!!』



『ヒイイイイ!? こんなバカなことがあつてたまるかああ!?』

限界突破を迎えた怒りに荒ぶる白き竜の咆哮が大地を震わせる。

現代に蘇った恐竜に匹敵する凄絶な戦意を剥き出しにしてウオーレックスは怒涛の激走を決めると我を忘れて狼狽するアークスタッグに殴り込んだ。

『俺はてめえみたいな自分が笑うためなら、他の誰かが泣こうが苦しもうがお構いなしのふざけた野郎が大ッ嫌いなんだよ!!』

弾丸のような体当たりでアークスタッグに流れ込んで馬乗りになつたウオーレックスは怒りが高まりすぎて震え気味の声を上げて、滅茶苦茶に拳を叩き込み続ける。

『特にてめえはあの子に向かつて人間の悲鳴や恐怖が最高だなんて抜かしやがった! 好き嫌い以前の問題なんだよ!! 論外つてやつだ!!』

『ぐおあ、ああ——!!』

アークスタッグの鎧のような甲殻は見るも無残にベコベコに凹み変形していた。下卑た暴言も吐けないぐらいにダメージを食らつたアークスタッグをウオーレックスは乱暴に片足を掴んで投げ飛ばすと壊れそうな勢いで再びサーチドライバーのグリップを捻り、必殺の一撃を繰り出そうと試みる。

『俺が——やるぜ』

『ボルテージ・ダイマックス!!』



※

都市公園で繰り広げられた激闘の一部始終を密かにビデオカメラのような単眼を持つ地球外の蟲を使役して観察していた者たちがいた。

『あらあら、スタッグちゃんったら負けてしまいましたわよ』

『死んだのかい、アイツ？ 情けない奴だな。ま、成虫になりたてて凶に乗っていたみたいだったし仕方ないね』

仄暗い闇の中で美しく大きな翅を持つ二人があっけらかんと言いつつ。

その可憐でたおやかな声とぶつきらぼうだが凜々しい声の二色に哀悼はない。愚か者への軽蔑が多少は込められていたがうっかり路上の蟻でも踏んでしまったような些細なものだ。

『おつふ……!! 君たちには仲間の死を悼む心は無いのですかな？ スタッグ氏は勇敢でござったよ。あの人間の雌の悲鳴などは控えめに言つて当方にもかなりのご褒美でしたぞ。デユフフフ』

その場にいる同胞たちを窘めて、アークスタッグの敗死を悲しむ野太い男性的な声の異形。しかし、言葉とは裏腹にそのインセクターは何処から手に入れたのか熱心に漫画

雑誌を読み漁っており心はまるで無関心な様子だった。

『彼がまだ若く惜しい素質があったかもしれないが身の程を弁えられなかったということだね。そんな半端者ならば居なくても別に困りはしないというものだよ。それにしても、当世の人間は大昔と違って随分と面白い道具を使うようじゃないか、興が乗るなあ』

優雅に足を組んでいた別のインセクターが冷ややかに言い切る。

華やかで気障つたらしい印象を受ける、颯爽とした喋り口調のものだ。

『私は人間たちの文明と言うものを我々も今一度ゆつくりと学ぶ必要があると考えるのだが……君はどう考える、グランデイス？』

『いずれは我らインセクターが食い尽くす有象無象だ。お前たちがそういった趣向に興が乗るといふのなら、ゆるりと構えて事に当たればいいことだ。俺には関係ない』

気障な声に話を振られたグランデイスと呼ばれたインセクターは淡白な声でつれない返事を答えた。頭部に長大で威容を誇る双角を持つ、大戦士の風格を醸し出している。

『存外に冷たいな。彼は君の同族のようなものじゃないのかい？ アークスタッグ・グランデイス』

『戦士の誇りもなく、引き際も見極められない愚者にかける情は持ち合わせていない。』

恐れを凌駕する勇士をこそ俺は尊ぶ』

にべもなく言い切ったグランデイス。

インセクターの大戦士たる彼の興味はむしろ、粗削りだが不屈の闘志を曝け出して奮闘したウォーレックスに向けられていた。

※

「ん、く……あれ、ここどこ？」

いつの間にか眠っていたクリューが目を覚ますとそこは清潔感のある白い天井が広がっていた。恐らくここは目覚めの森にある医務室なのだろう。

ベッドに体を横たえたまま首を傾げているとぼやけた視界にシャロンの顔が飛び込んできくる。

「おはよう、クリュー。大変だったね、ホントにがんばったよ」

「うん……刺激的な探検だった。都会は怖いところだね」

戦う度にボロボロに傷ついてくる自分を心から心配して、いまでもこうして微かに涙目になっているシャロンを安心させようとクリューは彼女なりのユーモアでぎこちなくおどけてみせた。そんな健気な彼女の心を汲んだのかシャロンは小声でバカと優しく

零して、クリューの絹のような黒髪を撫でた。

「あ……ねえ、ほら！ クリュー起きたわよ！ あんたも起きなさいよ、渡すものがあるんでしょ？」

「んああつ!! しまった……超寝てたわ」

聞き覚えのある声があるとさえ思えばむくりと大きな人影が起き上がったものなのでクリューは目を丸くして驚いた。

「た、平良!!? どうして?」

「お見舞いの品ってわけじゃないんだけどよ、こいつをどうしてもクリューに渡したくてな」

「これって、もしかして」

そう言って、平良はずっと懐に抱きかかえていた紙袋をクリューに手渡した。

紙袋の重みとほのかに香る覚えのあるこうばしさに彼女はハツとした顔をして照れ臭そうにしている平の顔を見た。

「あの後、たい焼き屋のおっちゃん探し出して作ってもらったんだけど、すっかり冷めちゃったかな。残念なことに俺の筋肉はまだ保温機能を手に入れるまで仕上がっていなかったようで……お恥ずかしい限りです」

「ビックリしたでしょ? 急に飛び出してどこか行ったっちゃと思えば、戻ってくるな

りクリューが起きるまでここに居るって聞かなくてね」

冷えて固くなったたい焼きの何とも言えない微妙な味をしまっているだけに平良はどことなく筋肉をすぼめてシユンとしている。良かれと思つてやったことが裏目に出たと感じていたからだろう。

気の利いたことが言えずに言い淀んでいた平良が口をもごつかせているとクリューは静かに紙袋からたい焼きを一つ手に取るとスツと平良に差し出した。

「いろいろあつて、今日はとてもお腹すいていたので助かります。平良も一緒に食べましょう？ もちろん、シャロンも」

「これ……食べ物で良いのよね？」

「はい！ お気に入りになりました」

ぐーつと可愛らしいお腹の音を鳴らしながら、クリューははにかみながら微笑んだ。そんな姿に平良はしばらく固まったが穏やかな笑顔を見せるクリューを見て、満足したように何時ものように堂々と胸を張る。

「なんか、長い付き合いになりそうだからよ。これからもよろしく頼みます」

こうして、彼らは出会った。

役者は揃い、舞台の幕は上がる。

竜の戦士たちの物語の本当の始まりはこの日——こうして、動き始めた。